59

筑前国福岡城三ノ丸

市鷹屋敷

（図録編）

福岡市教育委員会
No.
埋蔵文化財センター

福岡市教育委員会

序

黒田藩の居城として有名な福岡城は1957年に国史跡の指定を受け、本市では城内の環境整備に積極的に取り組んできました。また1987年には奈良・平安時代の迎賓館である「鴻臚館」跡が発掘確認され、その礎石とともに数多くの遺物が出土しました。その中には遠くイスラム世界から絹の道をはるばる伝わってきたものもあり、市民の皆さんと古代に夢を馳せ、この福岡市がアジアの拠点都市としてはたしてきた役割とその重要性をあらためて再確認することができました。

本書は1979年に「牡丹・芍薬園」の建設に先だって発掘調査を実施した三ノ丸「御鷹屋敷」の図録編です。「御鷹屋敷」は黒田長政が父黒田如水のために建てた隠居所と記録されています。発掘調査によって建物や溝が検出されましたが、この成果を活かして上部に遊歩道と東屋が設計配置されています。春ともなると大輪の花が咲きみだれ、福岡市の新しい名所になっています。

発掘調査から資料整理に至るまで多くの方々にご協力いただきました。心から感謝の意を表します。本書が郷土の歴史研究の資料として広く活用していただければ幸いです。

1990年3月　　福岡市教育委員会　教育長　佐藤善郎

桜のころの潮見櫓

凡　例

1．本書は、福岡市埋蔵文化財調査報告書第59集「筑前国福岡城三ノ丸御鷹屋敷」の図録編である。
2．御鷹屋敷の発掘調査は、昭和54年度の国庫補助を受けて1979年７月17日から８月11日にかけて実施した。
3．発掘終了後、資料整理を行い報告書を作成したが、諸般の理由で図録編の発行が遅くなっていた。
4．その後、福岡城関連の遺跡がいくつか発掘調査されたが、先の本文編の内容を大きく訂正する必要はないと思われるので図録編には手を加えなかった。
5．ただ、高取焼については、古窯跡の発掘によって新しい知見も増えてきたので、精力的に研究されている福岡市美術館の尾崎直人さんに最近の研究成果から見た御鷹屋敷出土の陶器類についての原稿をお願いした。

満開の牡丹・芍薬園

目　次

PL. 1　国史跡福岡城　航空写真

PL. 2

1　御鷹屋敷遠景　1979年8月（北から）

2　御鷹屋敷遠景　福岡大学移転前（北西から）

PL. 3

1　1号トレンチ　2　3号トレンチ

PL. 4

1　8号トレンチ　Ⅰ号溝（南から）

2　Ⅰ号溝コーナー（西から）

PL. 5

1　5号トレンチ　Ⅱ号溝（西から）

2　4号トレンチ　Ⅱ号溝南東コーナー（西から）

PL. 6

1　7号トレンチ　Ⅱ号溝（東から）

2　8号トレンチ　礎石（南から）

PL. 7

1　福岡城古絵図―（1）　2　福岡城古絵図―（2）

PL. 8

1　福岡城古絵図―（3）　2　福岡城古絵図―（4）

PL. 9

1　「福岡第24連隊鎮魂紀念祭之図」（明治28年発行）

2　福岡第24連隊城内練兵場航空写真（昭和6年撮影）

PL. 10　3号トレンチ出土遺物実測図

PL. 11　3号トレンチ出土遺物

PL. 12　Ⅰ号溝出土遺物実測図（1）

PL. 13　Ⅰ号溝出土遺物（1）

PL. 14　Ⅰ号溝出土遺物実測図（2）

PL. 15　Ⅰ号溝出土遺物（2）

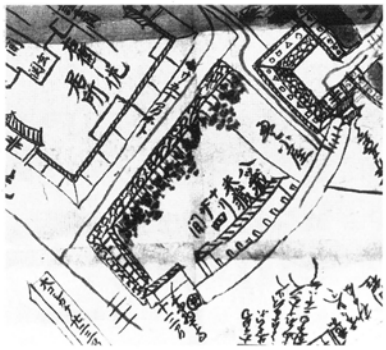
PL. 16　Ⅱ号溝出土瓦実測図（1）　巴瓦　三つ巴文1類

PL. 17　Ⅱ号溝出土瓦（1）　巴瓦　三つ巴文1類

PL. 18　Ⅱ号溝出土瓦実測図（2）　巴瓦　三つ巴文2類

PL. 19　Ⅱ号溝出土瓦（2）　巴瓦　三つ巴文2類

1　黒田如水



2　御鷹屋敷の古絵図

3　明治初期の福岡城

4　炎天下の発掘作業

表　紙　「長政公像」重要文化財　寛永9年（1632年）

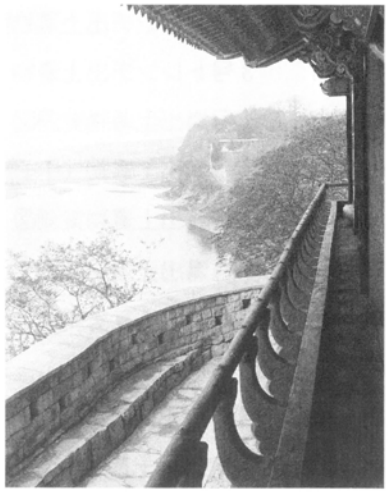
PL. 20　Ⅱ号溝出土瓦実測図（３）　巴瓦　三つ巴文３類，黒餅文
PL. 21　Ⅱ号溝出土瓦（３）　巴瓦　三つ巴文３類，黒餅文
PL. 22　Ⅱ号溝出土瓦実測図（４）　巴瓦　三つ巴藤文１類
PL. 23　Ⅱ号溝出土瓦（４）　巴瓦　三つ巴藤文１類
PL. 24　Ⅱ号溝出土瓦実測図（５）　巴瓦　三つ巴藤文２類
PL. 25　Ⅱ号溝出土瓦（５）　巴瓦　三つ巴藤文２類
PL. 26　Ⅱ号溝出土瓦実測図（６）　唐草瓦
PL. 27　Ⅱ号溝出土瓦（６）　唐草瓦
PL. 28　Ⅱ号溝出土瓦実測図（７）　丸瓦
PL. 29　Ⅱ号溝出土瓦（７）　丸瓦
PL. 30　３号トレンチ・Ⅱ号溝出土瓦実測図（８）丸瓦，敷瓦，壁瓦
PL. 31　３号トレンチ・Ⅱ号溝出土瓦（８）　谷瓦，敷瓦，壁瓦
PL. 32　Ⅱ号溝出土瓦実測図（９）　谷瓦，塀瓦
PL. 33　Ⅱ号溝出土瓦（９）　塀瓦
PL. 34　Ⅱ号溝出土瓦実測図（10）　鬼瓦
PL. 35　Ⅱ号溝出土瓦（11）　鬼瓦
PL. 36　文字瓦拓影（１）
PL. 37　文字瓦（１）
PL. 38　文字瓦拓影（２）
PL. 39　御鷹屋敷調査区平面図　縮尺 1/1000
PL. 40　Ⅱ号溝出土遺物実測図（１）
PL. 41　Ⅱ号溝出土遺物（１）
PL. 42　Ⅱ号溝出土遺物実測図（２）
PL. 43　Ⅱ号溝出土遺物（２）
PL. 44　Ⅱ号溝出土遺物実測図（３）
PL. 45　Ⅱ号溝出土遺物（３）
PL. 46　中山平次郎博士，高野孤鹿氏採集資料瓦
（名島城内、福岡城内）
PL. 47　高野孤鹿氏採集資料（福岡城内）

48～52
御鷹屋敷跡から出土した
茶陶関係の陶片について

5　発掘作業員の皆さんと

6　「今宿三右衛門」瓦工場

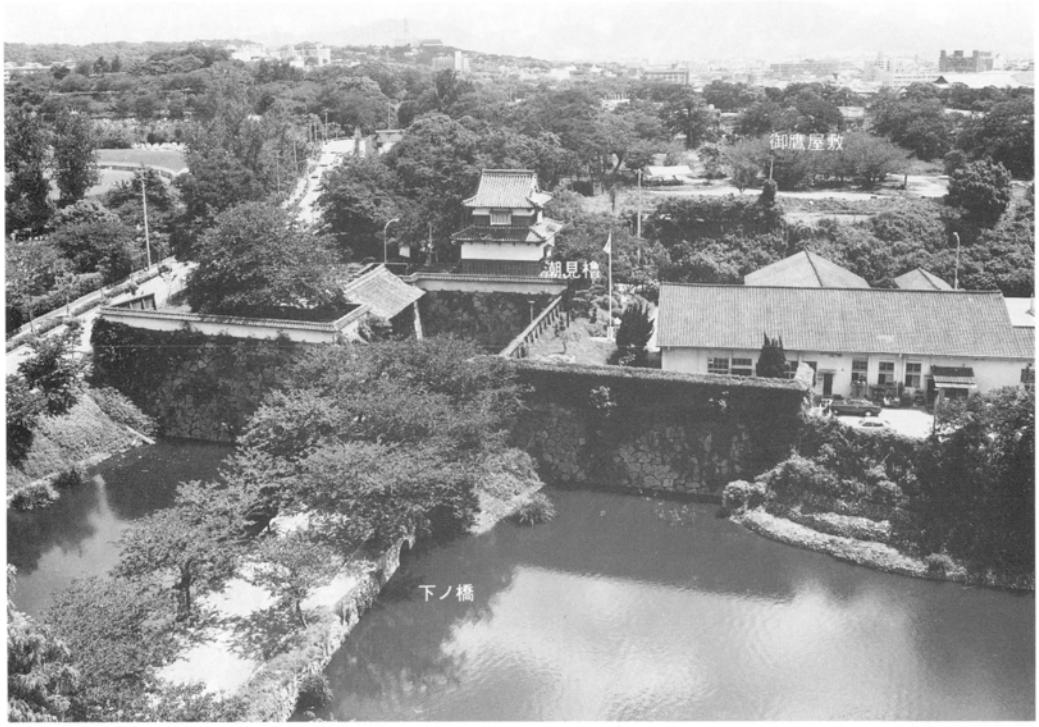
7　高野孤鹿氏資料



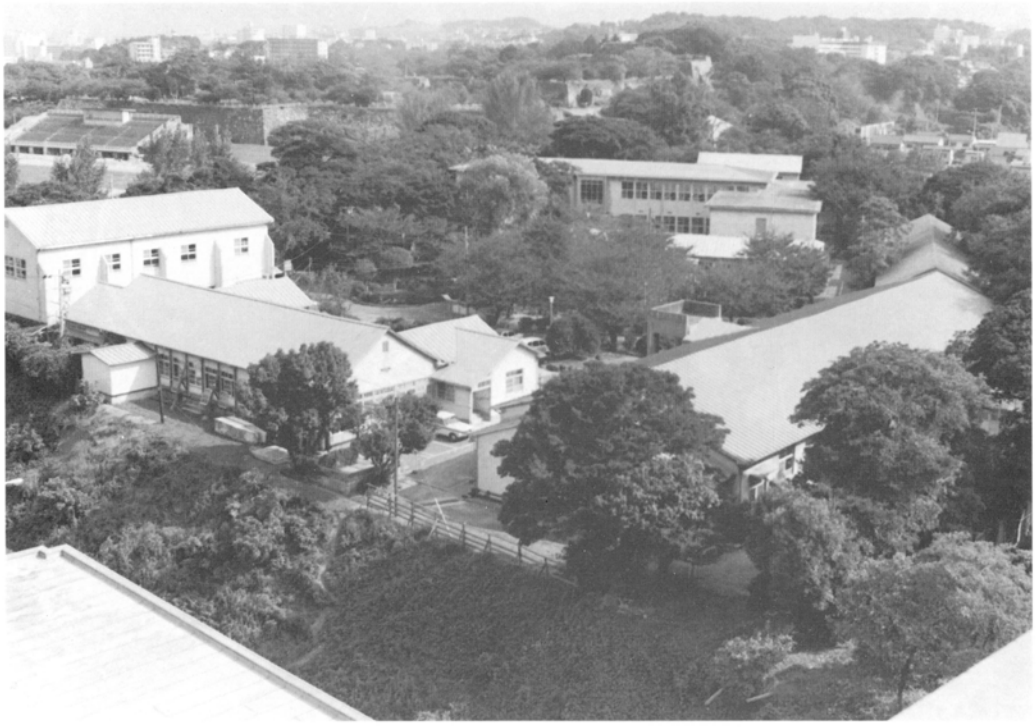
8 ▶
福岡城のモデルとなったといわれる韓国晋州城
（田坂大蔵氏撮影）

国史跡福岡城　航空写真　アミ部は福岡城の堀を示す

PL. 2　潮見櫓と下ノ橋



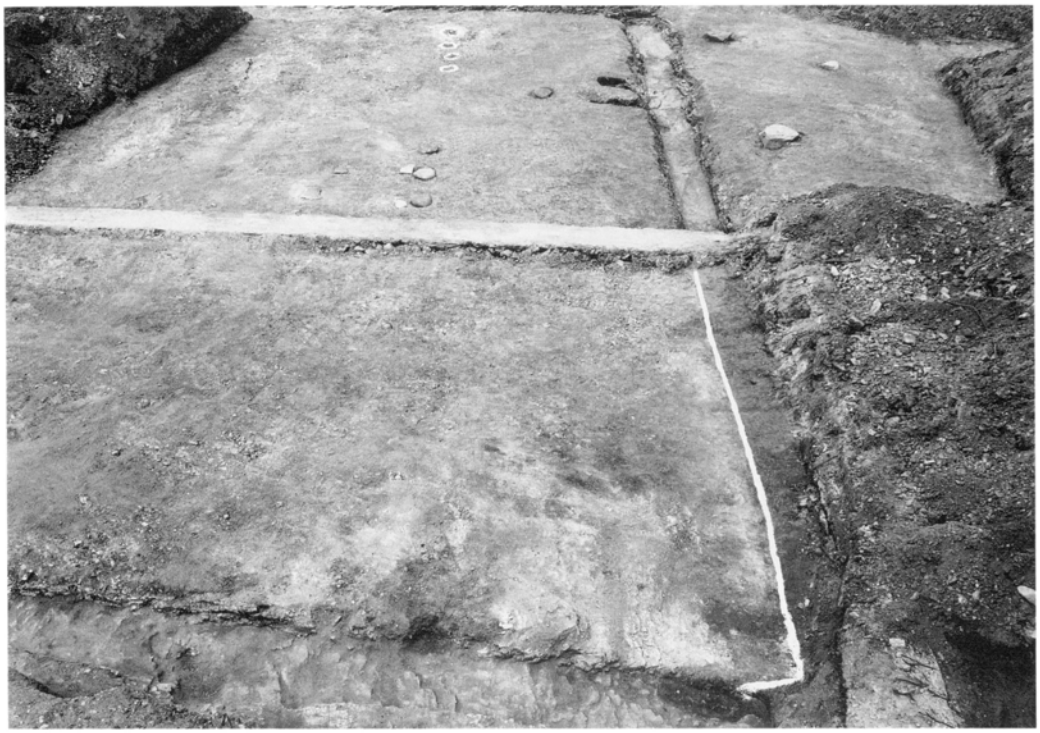
1　御鷹屋敷遠景（1979年8月撮影　北から）



2　御鷹屋敷遠景（福岡大学移転前　北西から）

1　1号トレンチ　潮見櫓は三ノ丸北西隅にあったものを現在の位置に移築復原された。

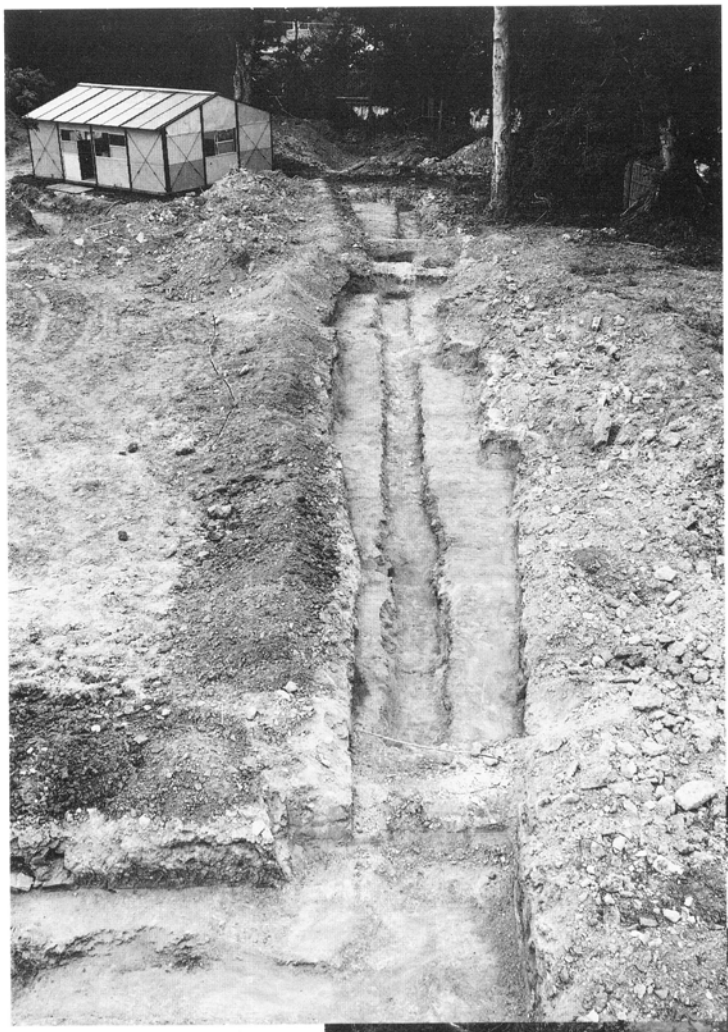
2　3号トレンチ　礎石状の石の下よりＰＬ.10.11の遺物が出土した。鴻臚館時代の瓦や旧陸軍の薬莢など新旧の遺物が混在している。



▲ 1　8号トレンチ　Ⅰ号溝（南から）　Ⅰ号溝の東西に礎石が並ぶ。
調査終了後、砂で厚く覆い上部に東屋が建てられている。

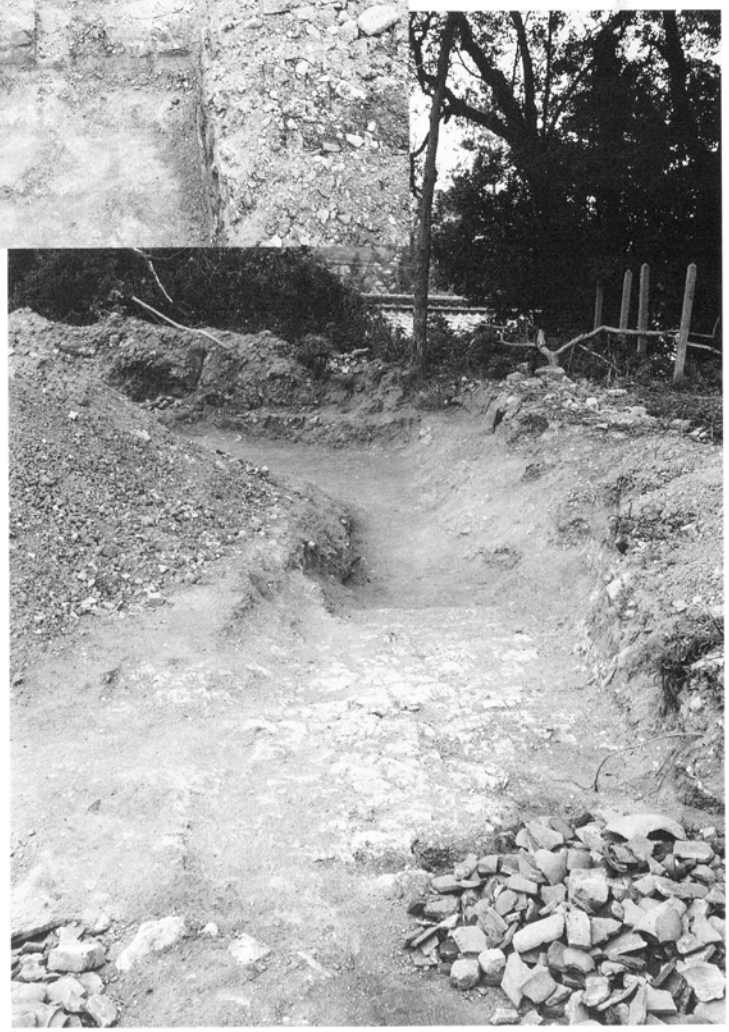
◀ 2　Ⅰ号溝コーナー（西から）

Ⅰ号溝は幅1.0m～1.2m、
深さ約0.4m～0.5mで逆台
形の断面に掘られている。



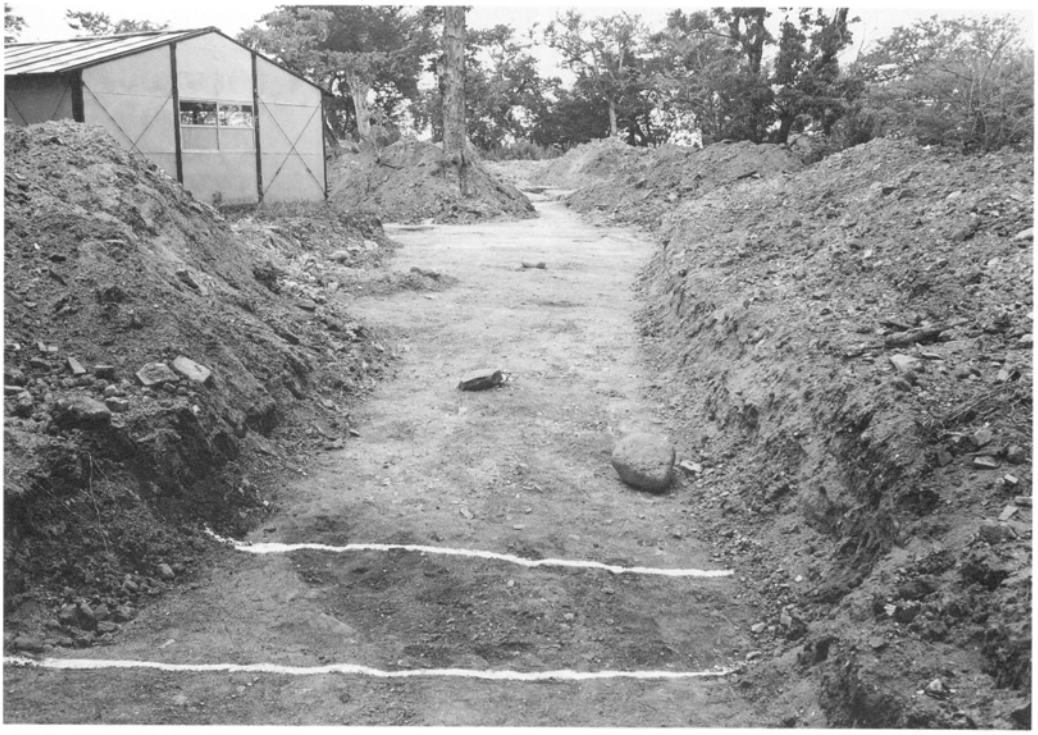
◀ 1　5号トレンチ　Ⅱ号溝
（西から）

Ⅱ号溝は岡の周縁に凵形に掘られている。
南側の長さは53mを測る。

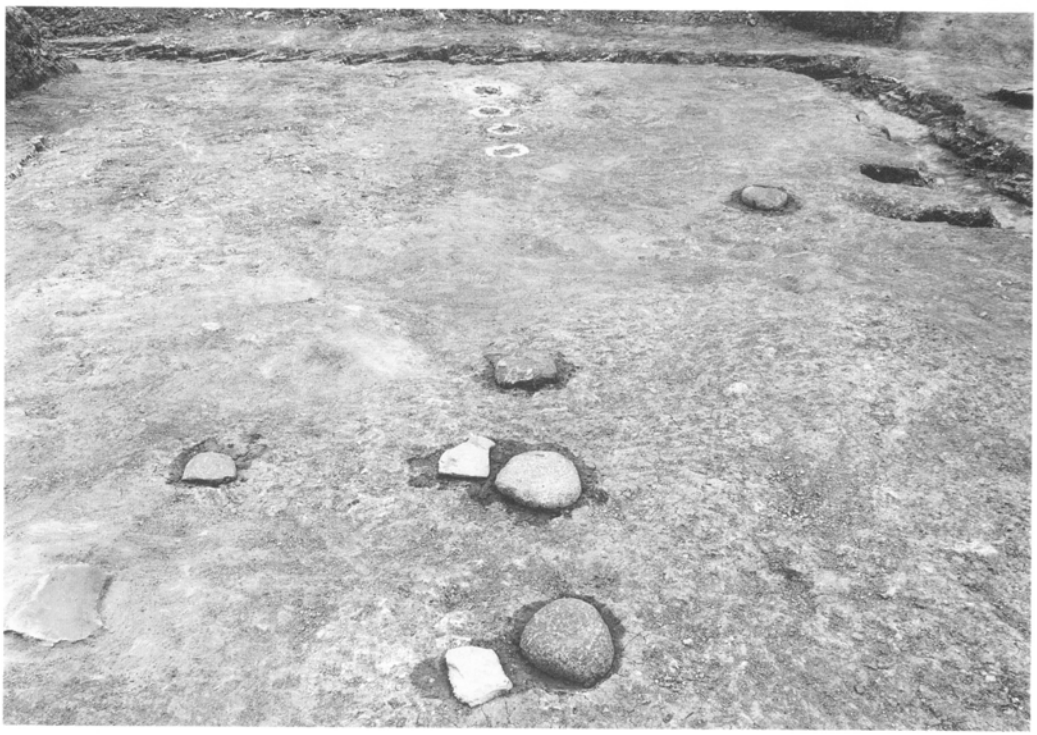


2　4号トレンチ　Ⅱ号溝 ▶
南東コーナー
（西から）

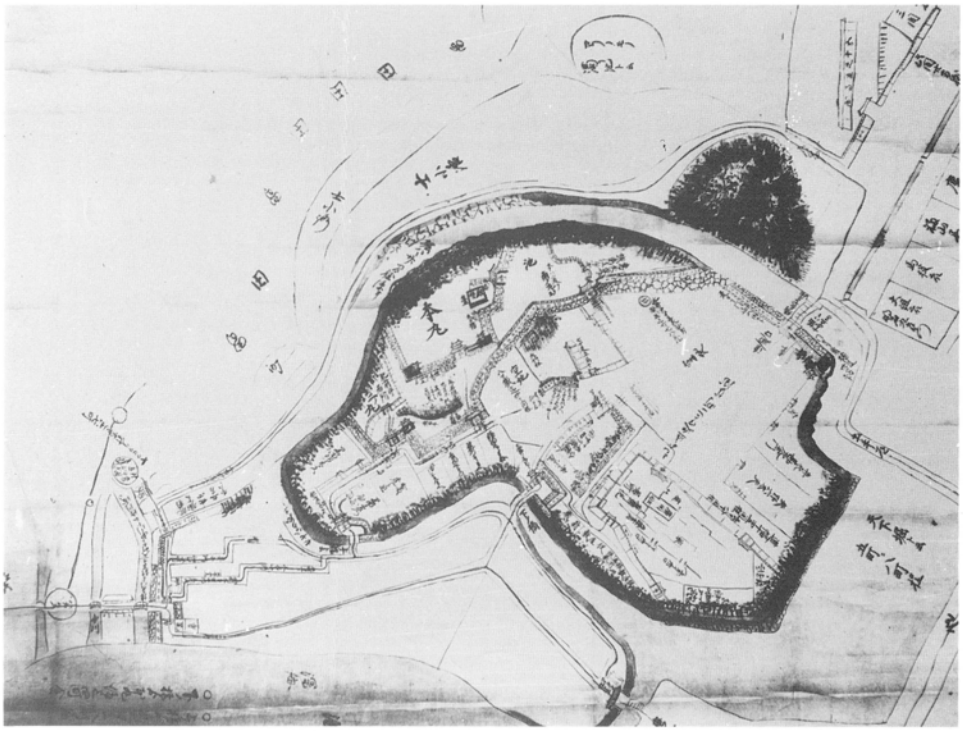
Ⅱ号溝はⅠ号溝と同じように断面は逆台形をしているが、この部分は福岡大学の校舎で破壊され、溝の肩がよく残っていない。
瓦が特に多く出土した。



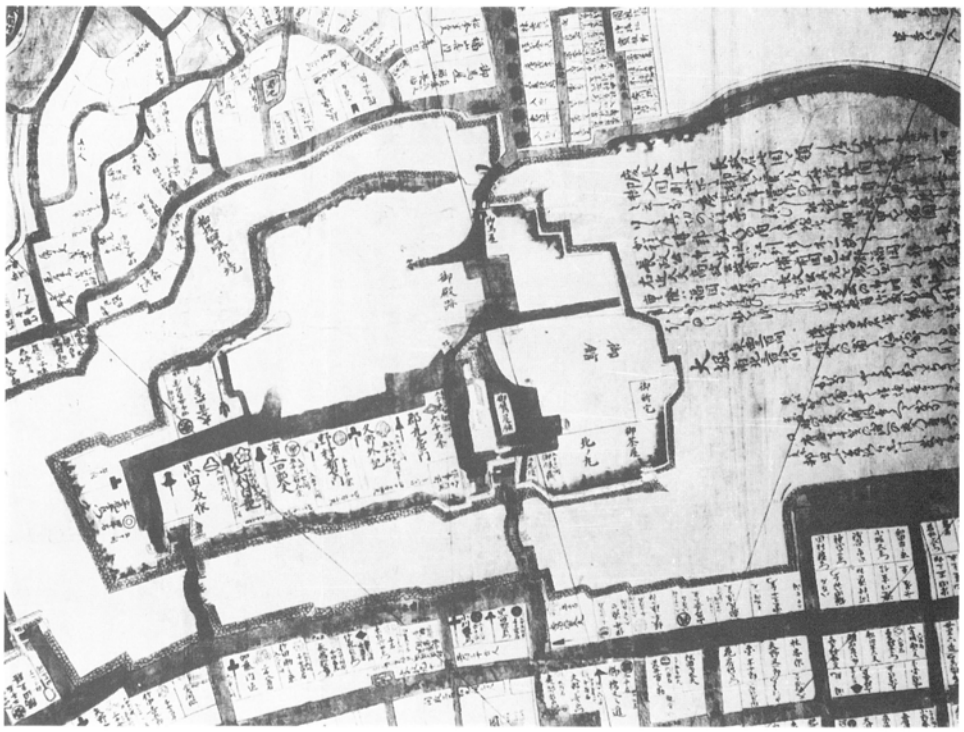
1　7号トレンチ　Ⅱ号溝（東から）　東南隅より約15mの位置にあたる。西側に礎石と思われる石があるが建物としてのまとまりはない。



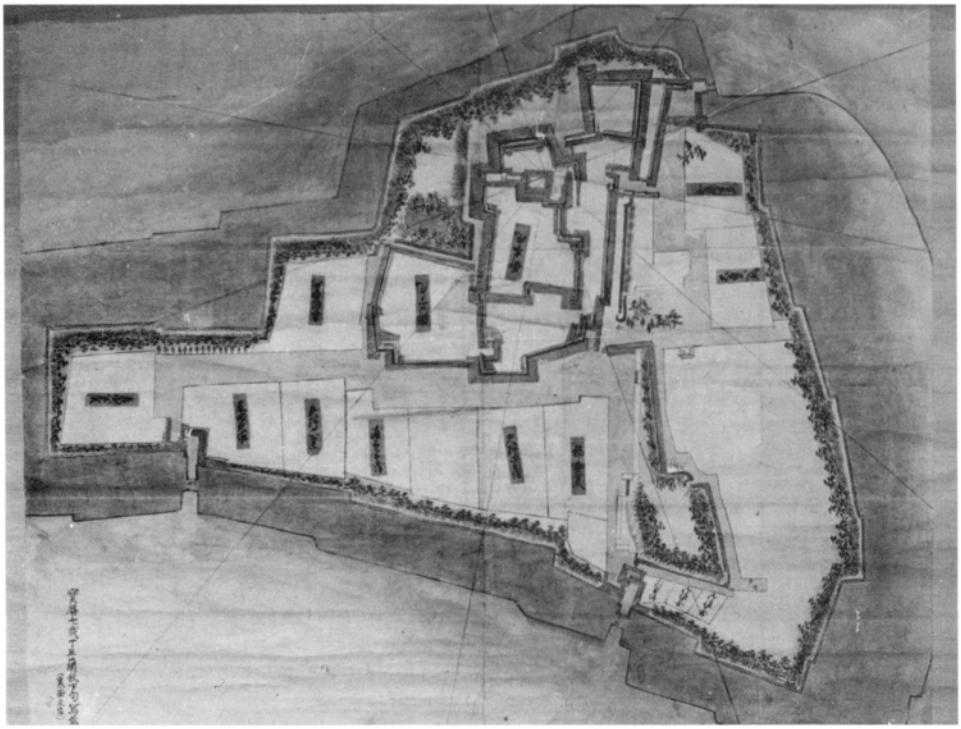
2　8号トレンチ　礎石（南から）



1　福岡城古絵図（1）　九州大学文化史研究施設所蔵
三代藩主黒田光之時代のものといわれている。
発掘地点の岡には何も書かれていない。

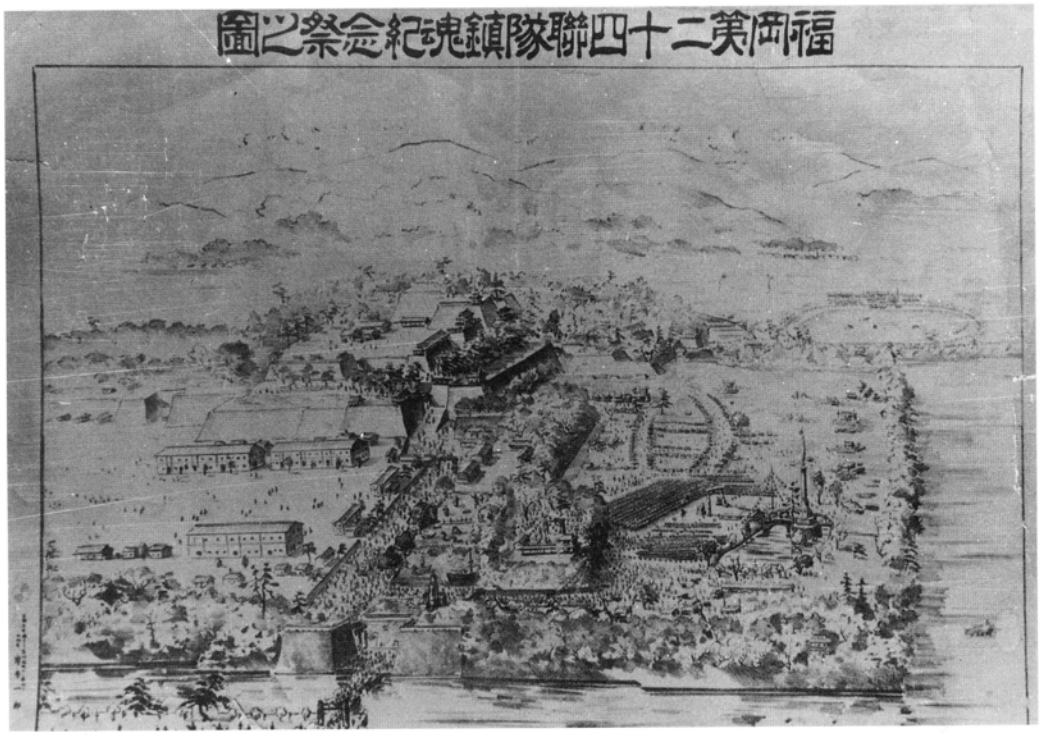


2　福岡城古絵図（2）　1812年（文化9年）写し。
発掘地点には「御鷹屋舗」と書かれている。

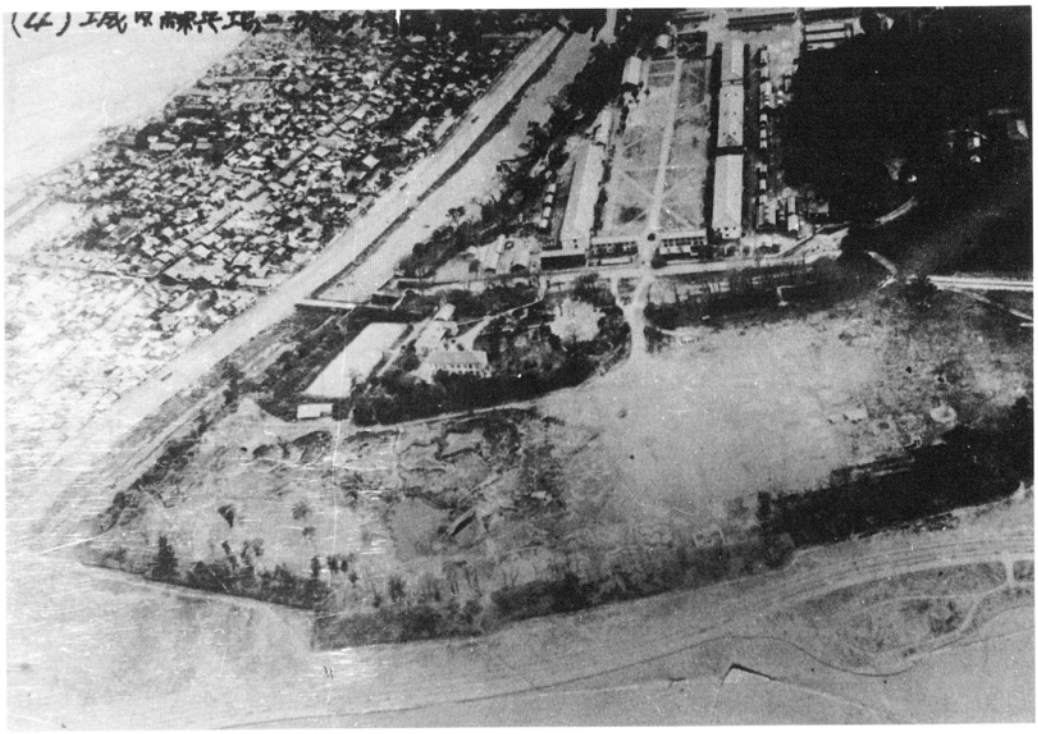


1　福岡城古絵図（3）

2　福岡城古絵図（4）

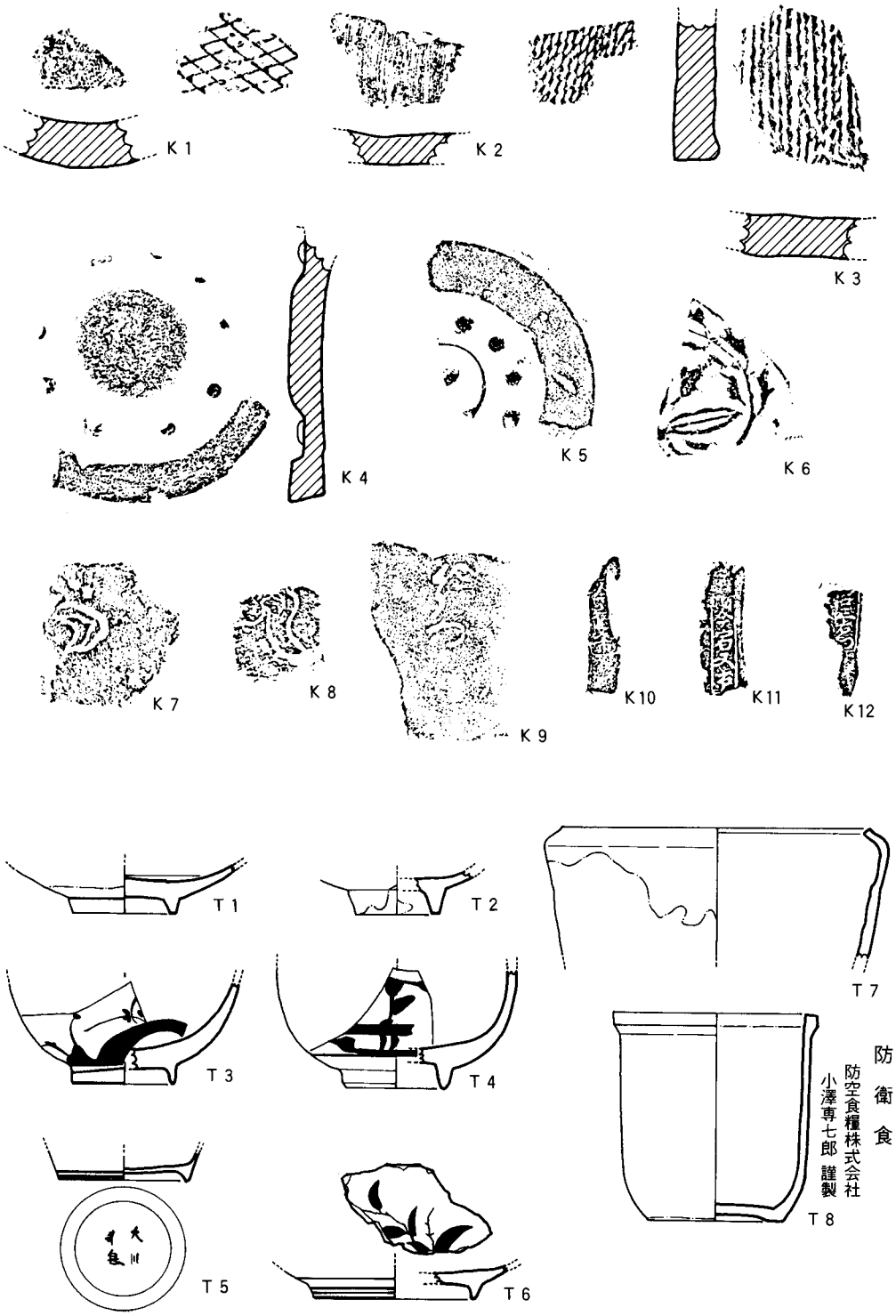


1　「福岡第24連隊鎮魂紀念祭之図」（明治28年発行）
御鷹屋敷の岡には、二層の櫓とこれに接続した平屋が描かれている。
兵舎、石垣ともにきわめて写実的である。

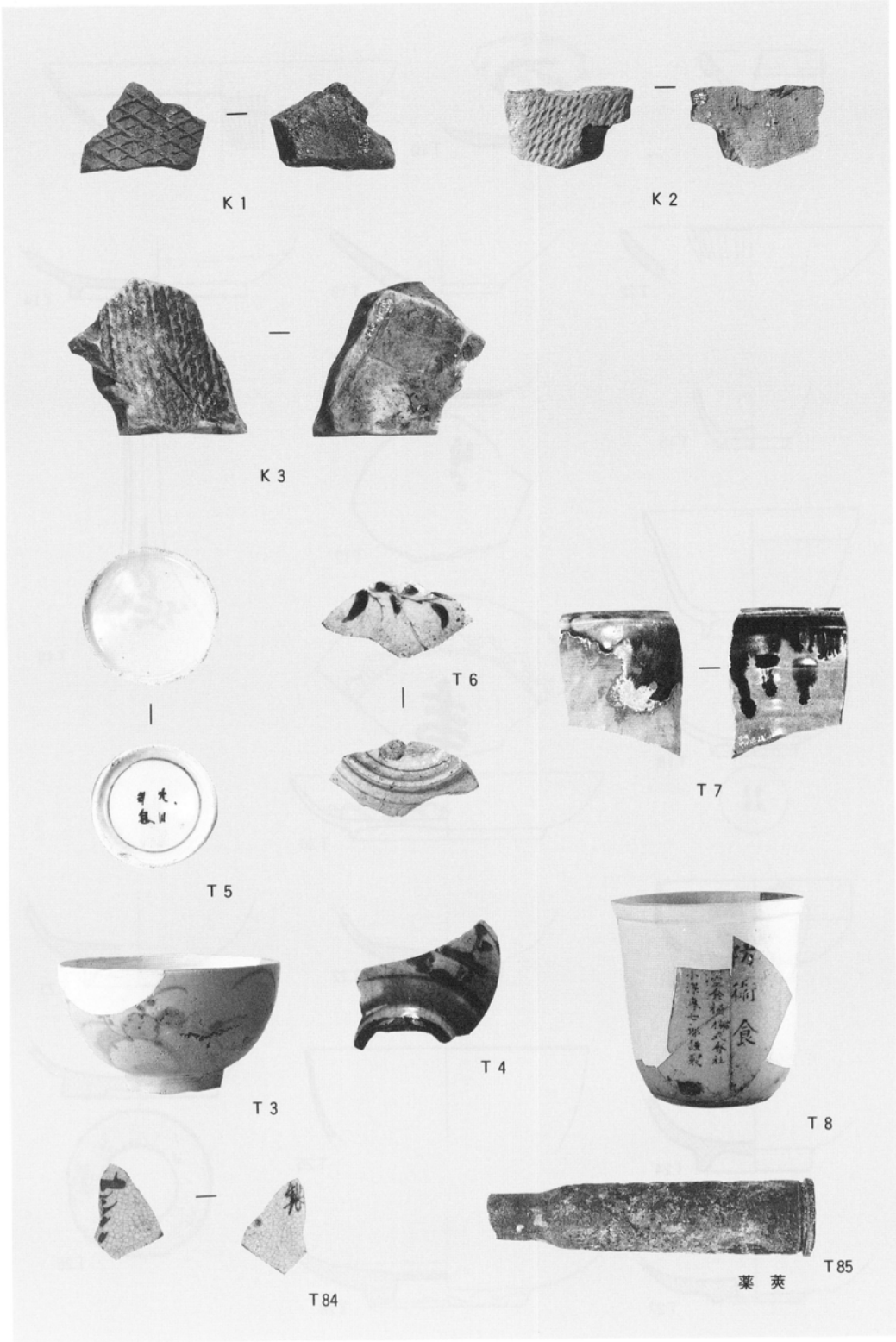


2　福岡第24連隊城内練兵場航空写真　（昭和６年撮影）
現在の大濠公園の上空から撮影されたこの写真から当時の
兵舎や堀りばたの町並みのようすがよくわかる。

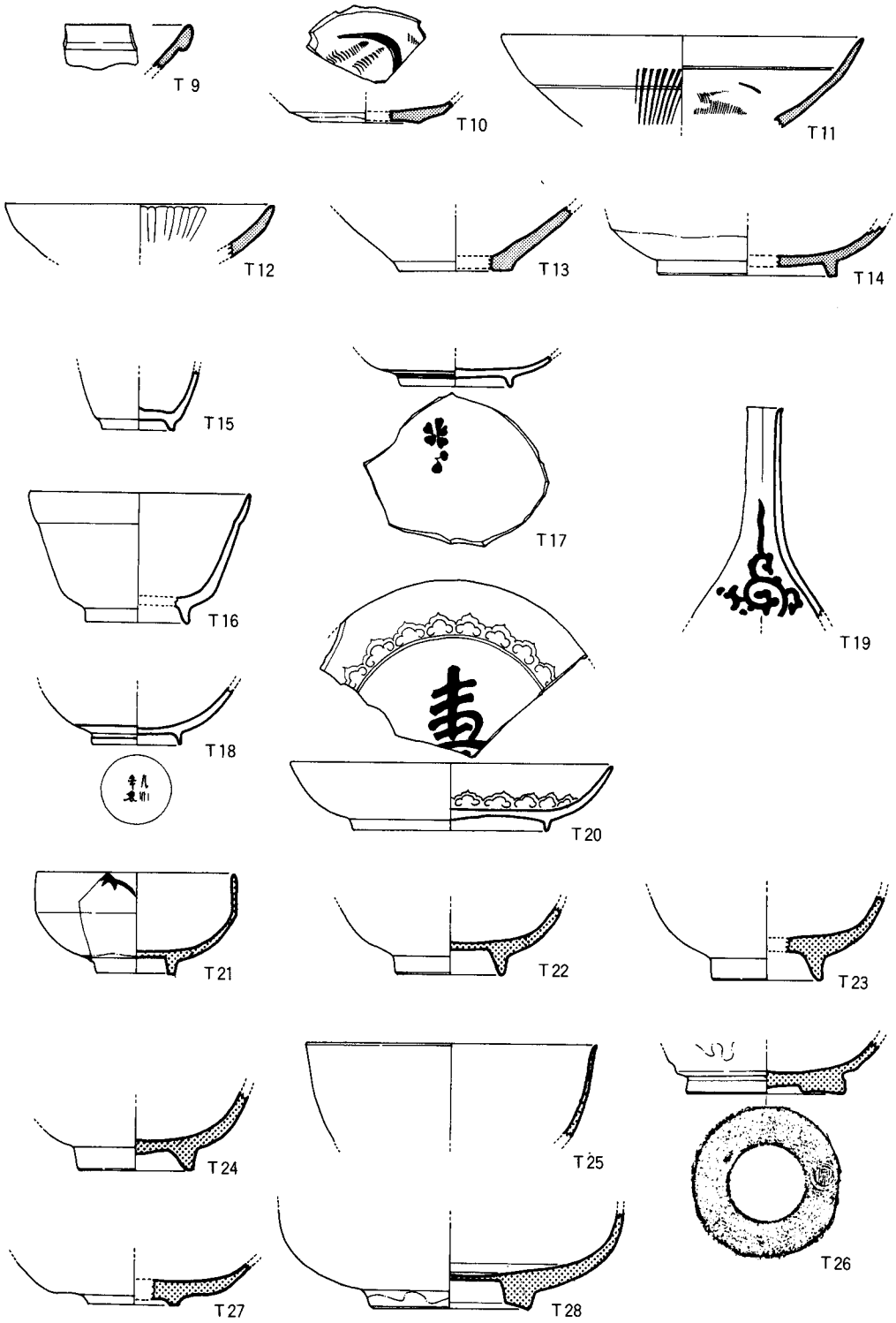
PL. 10　　3号トレンチの遺物



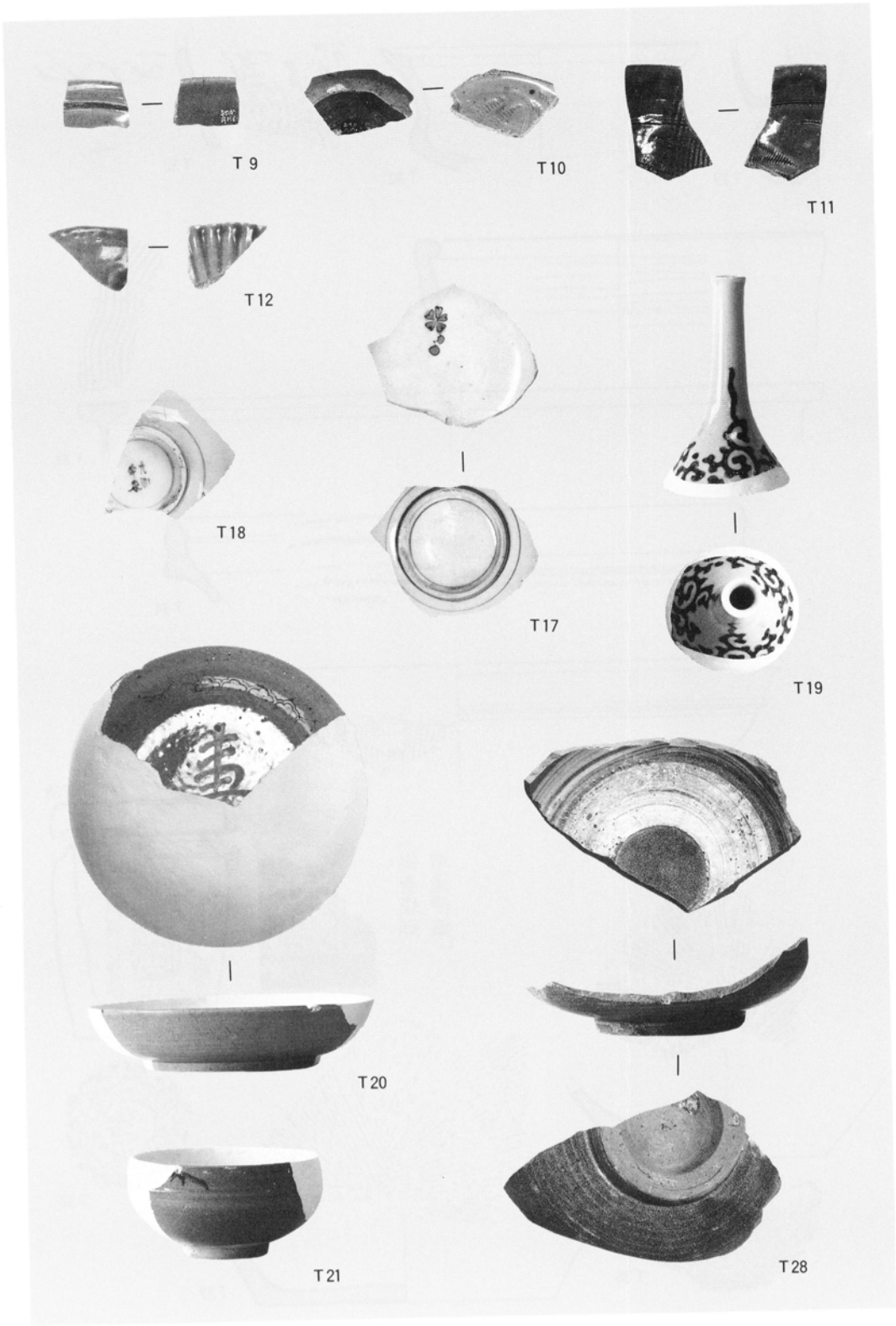
3号トレンチ出土遺物実測図　縮尺 ½、⅓



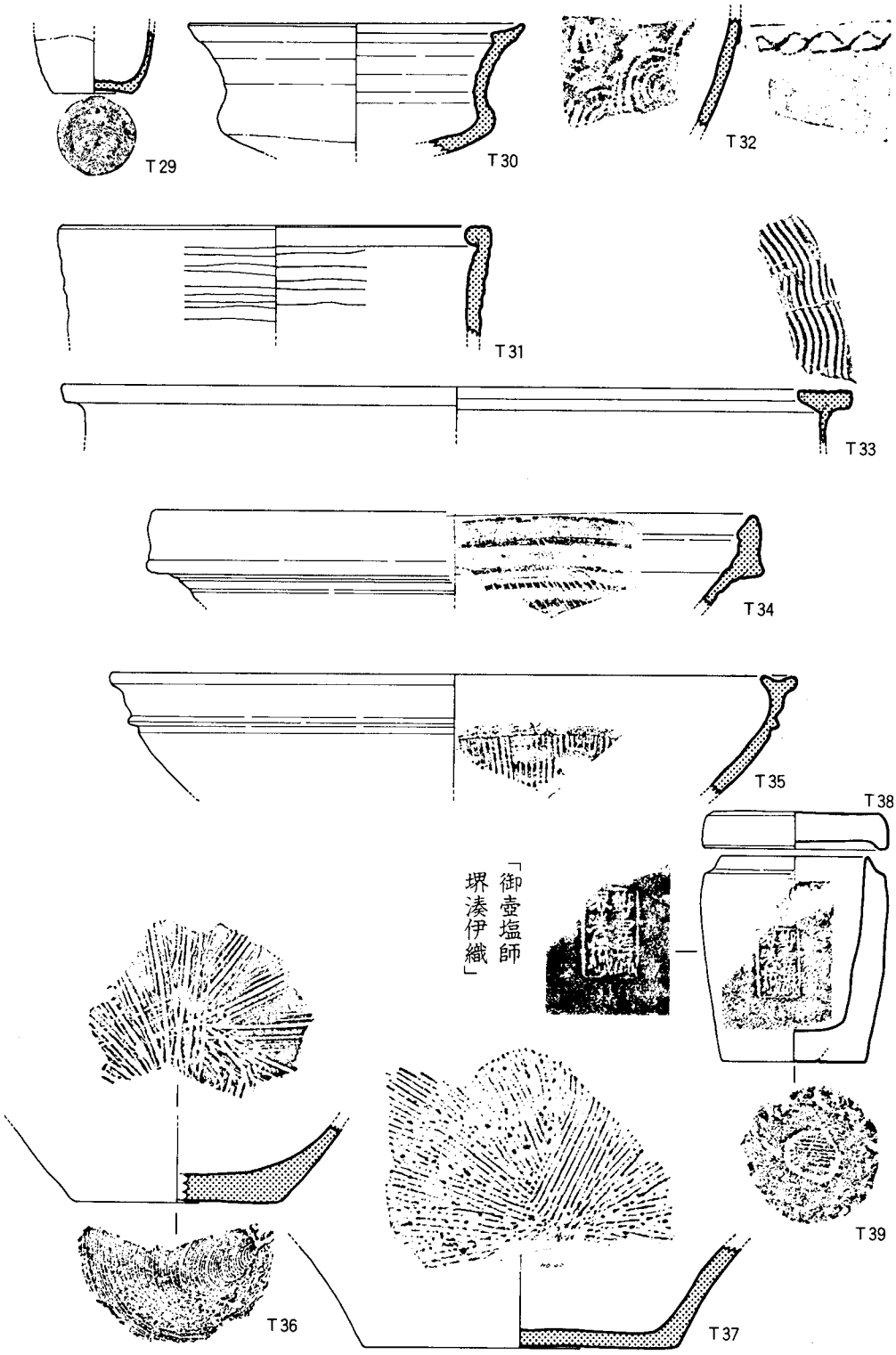
3号トレンチ出土遺物　縮尺 1/1、1/3



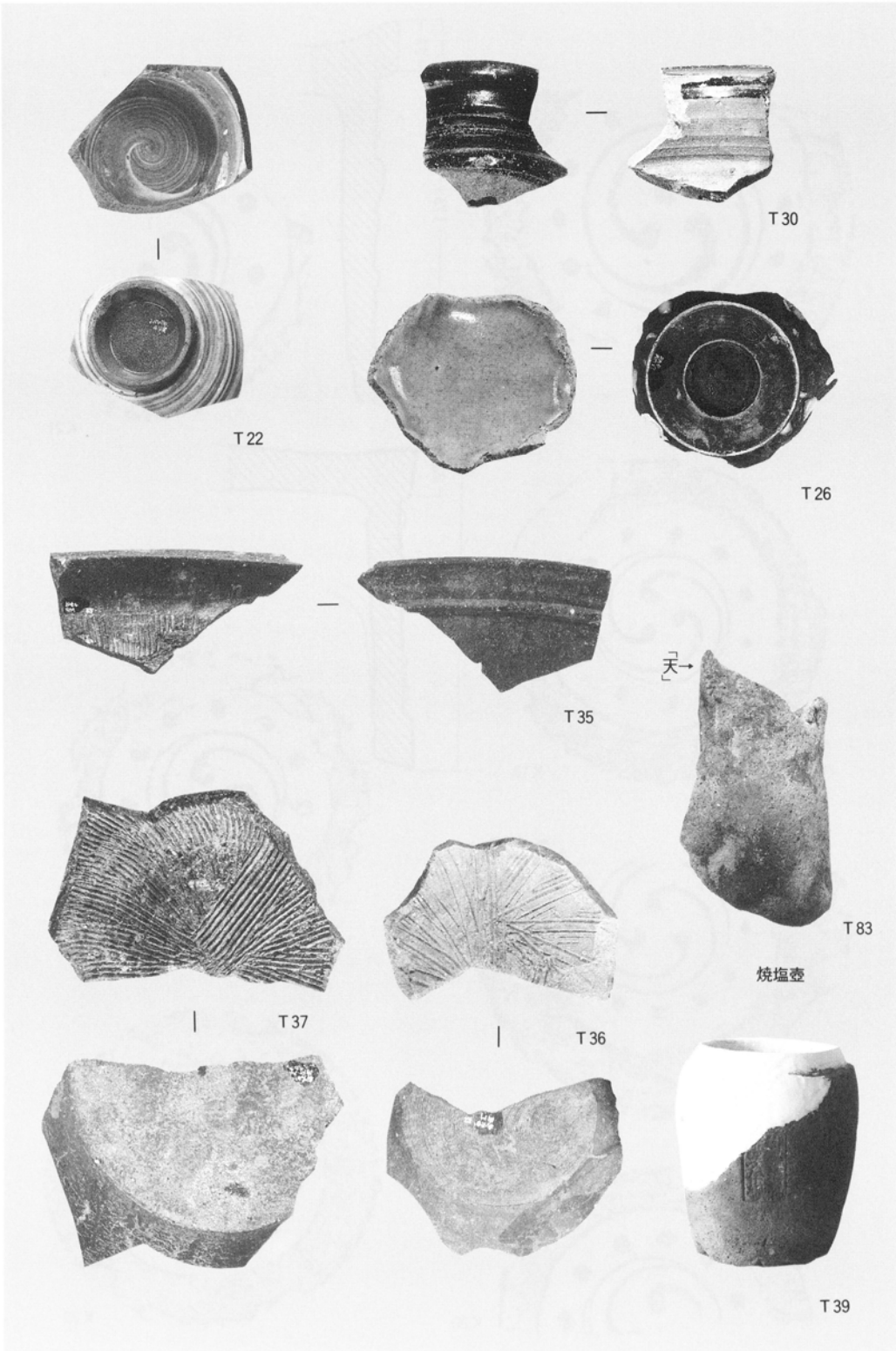
Ⅰ号溝出土遺物実測図（1）　縮尺 1/3



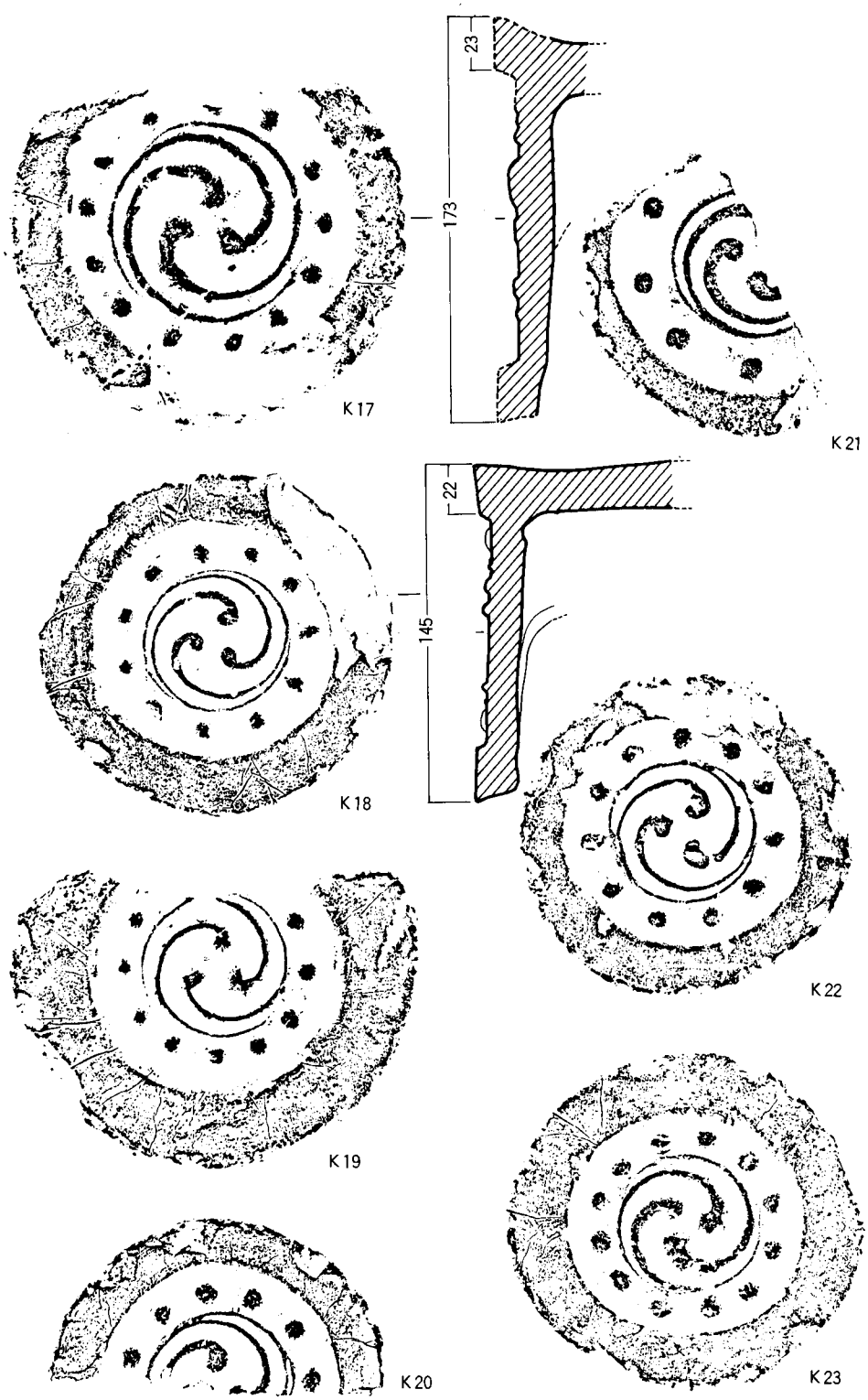
Ⅰ号溝出土遺物（1）　縮尺 1/3



Ⅰ号溝出土遺物実測図（２）　縮尺 1/3



Ⅰ号溝出土遺物（２）　縮尺 1/3



Ⅱ号溝出土瓦実測図（１）　縮尺 1/3　巴瓦　三つ巴文１類

K17

K21

K18

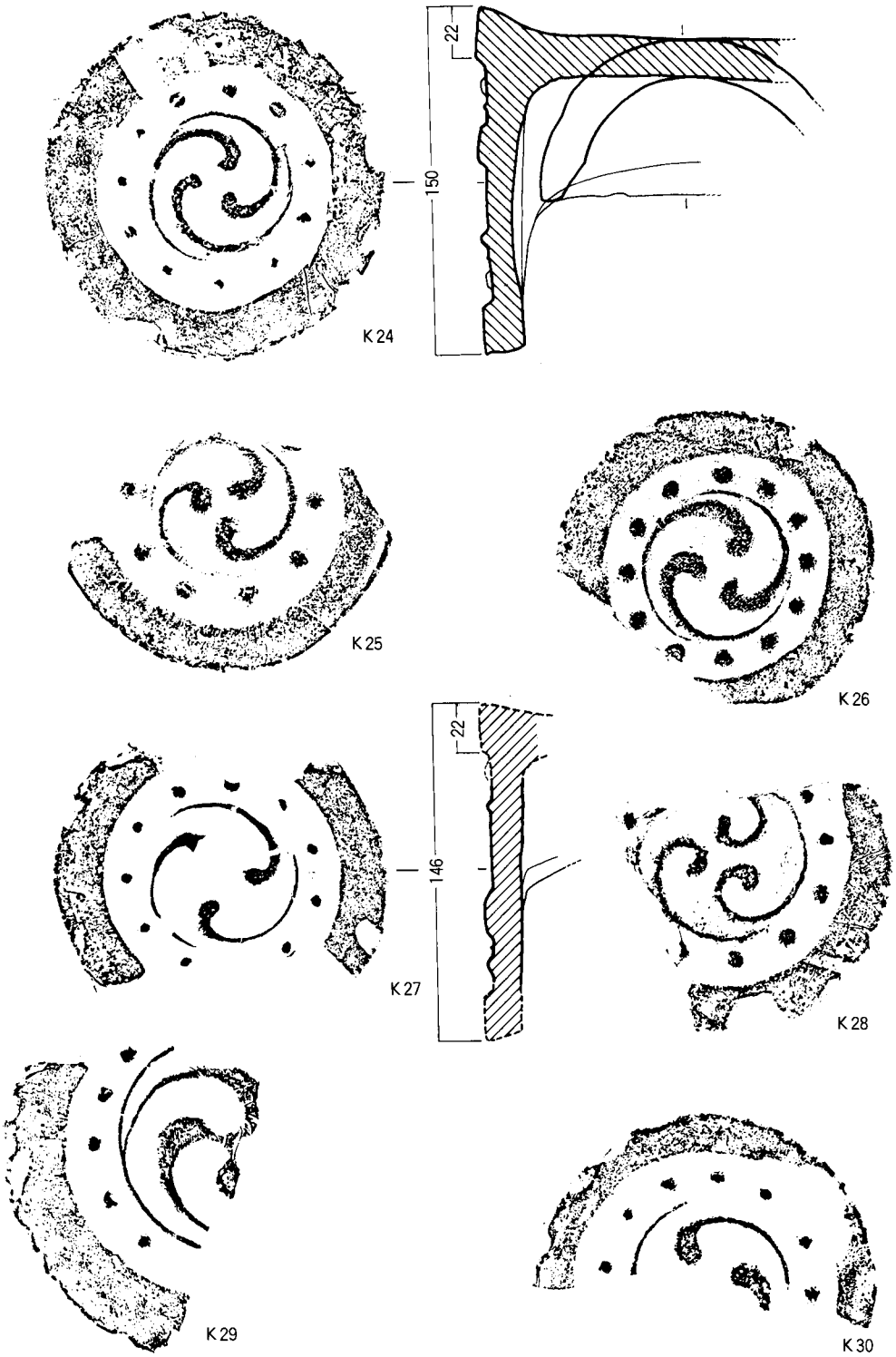
K22

K19

K23

K20

Ⅱ号溝出土瓦（１）　縮尺 1/3　巴瓦　三つ巴文１類



Ⅱ号溝出土瓦実測図（２）　縮尺 1/3　巴瓦　三つ巴文２類

K 24

K 25

K 26

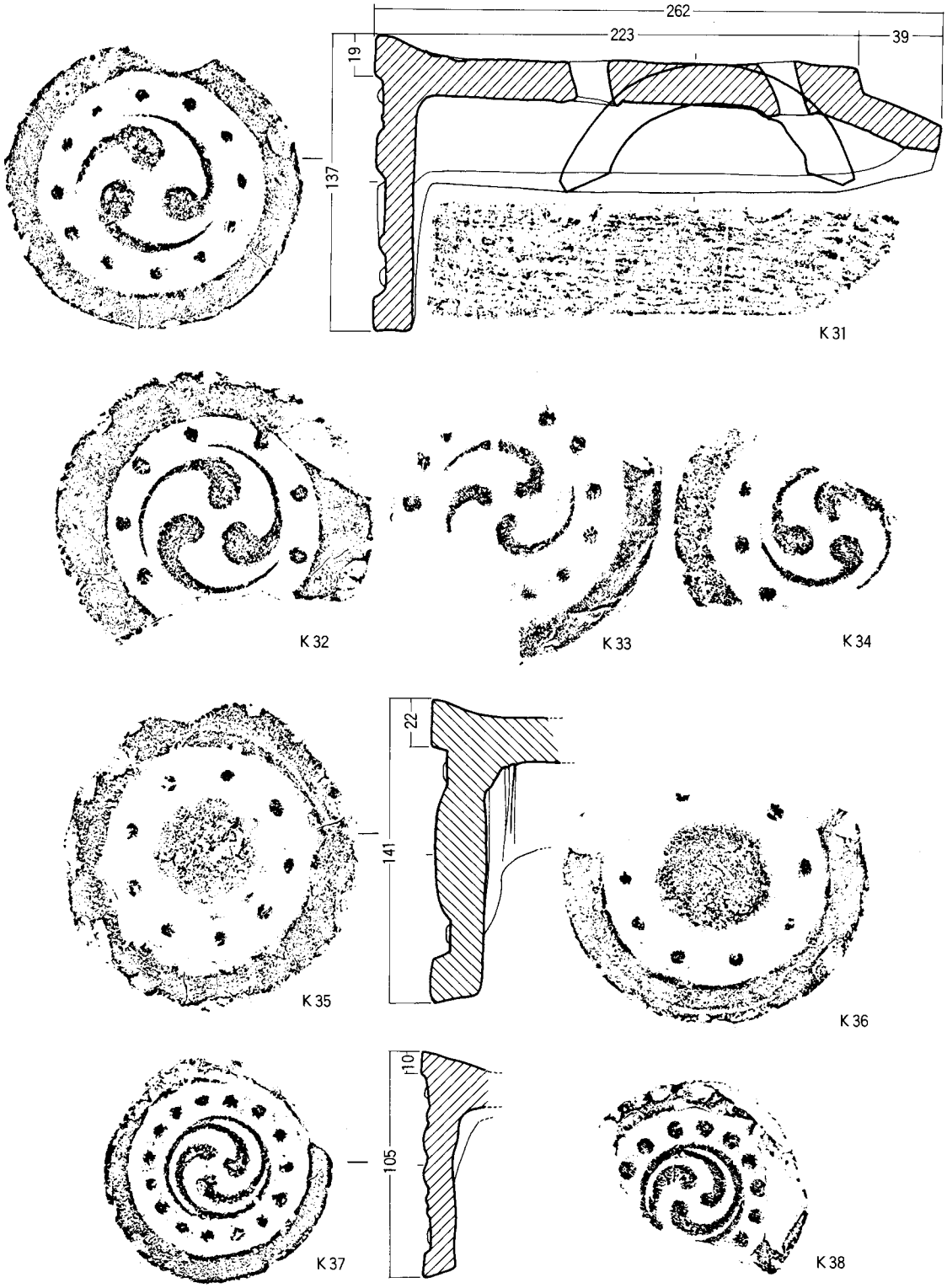
K 27

K 28

K 29

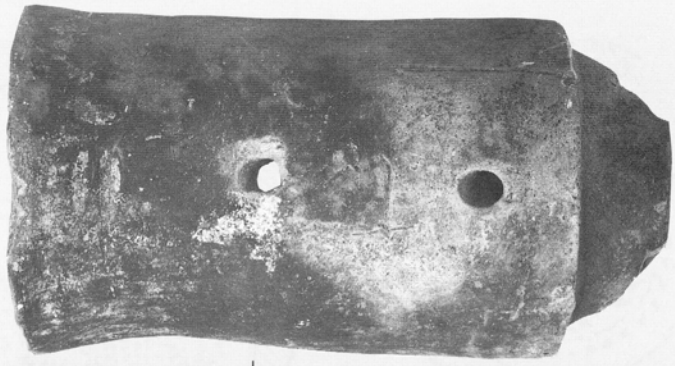
K 30

Ⅱ号溝出土瓦（２）　縮尺 1/3　巴瓦　三つ巴文２類

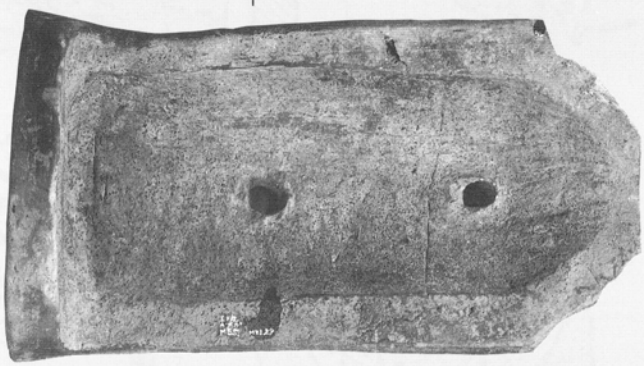


Ⅱ号溝出土瓦実測図（３）　縮尺 1/3　巴瓦　三つ巴文３類　黒餅文

K 31

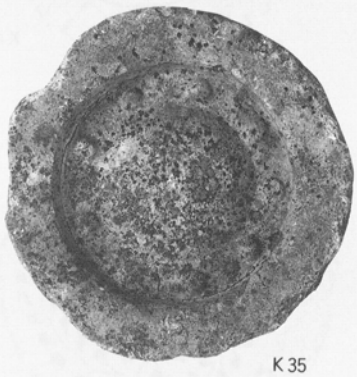


K 32



K 33

K 34

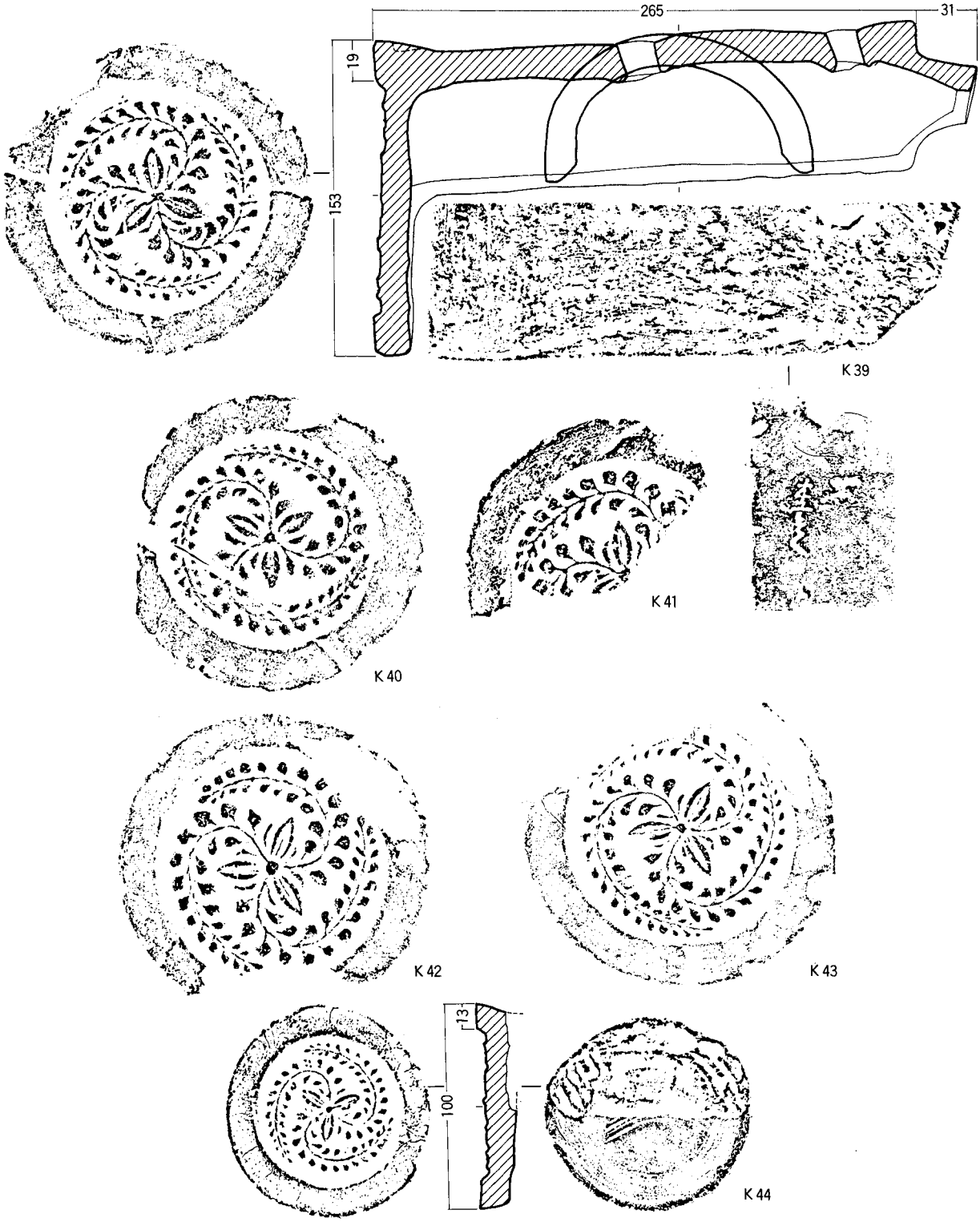

K 35

K 37

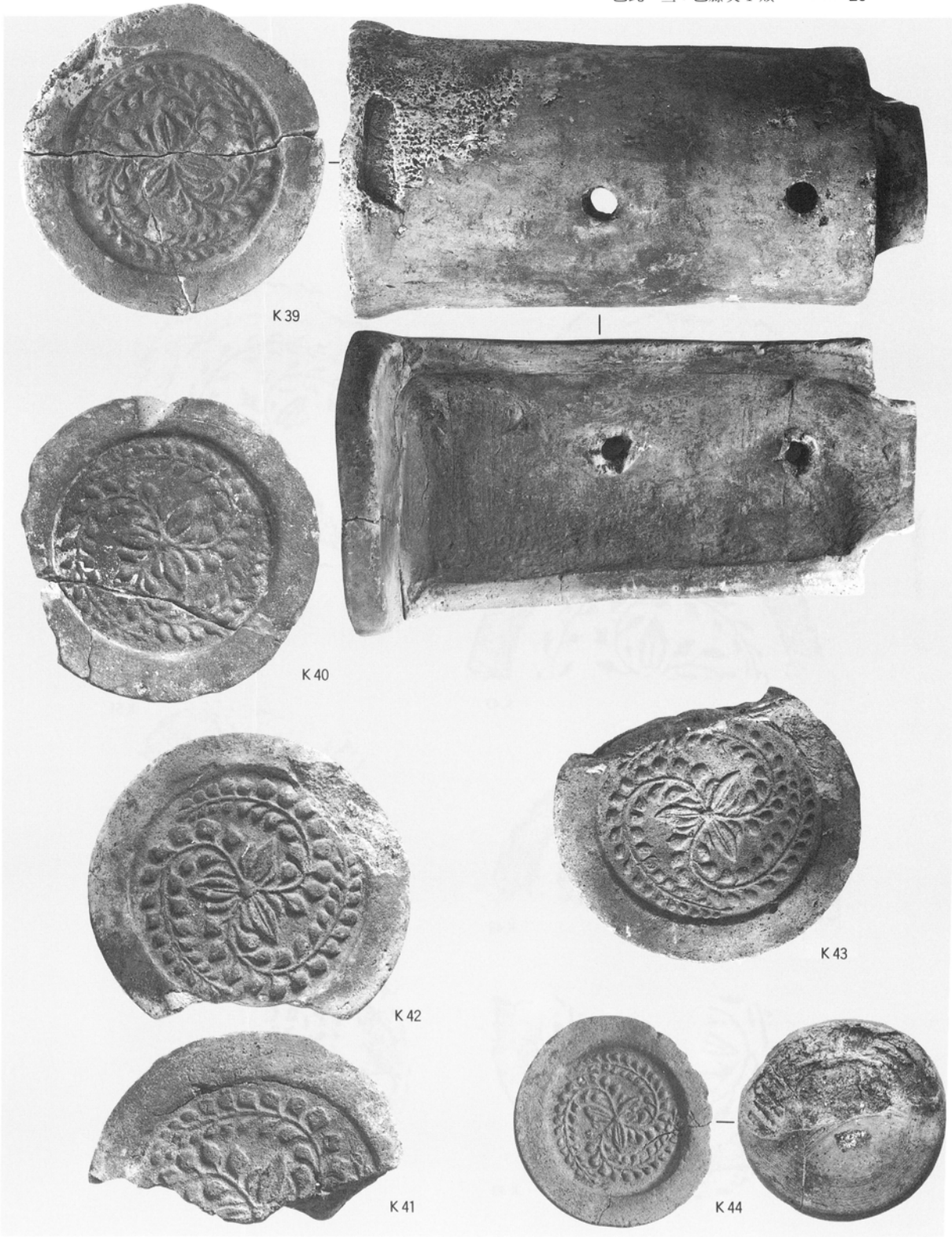
K 38

K 36

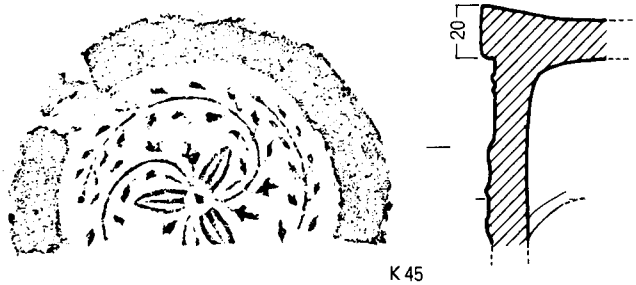
Ⅱ号溝出土瓦（３）　縮尺 1/3　巴瓦　三つ巴文３類　黒餅文



Ⅱ号溝出土瓦実測図（４）　縮尺 1/3　巴瓦　三つ巴藤文１類



Ⅱ号溝出土瓦（４）　縮尺 1/3　巴瓦　三つ巴藤文１類



K 45

K 46

K 50

K 47

K 51

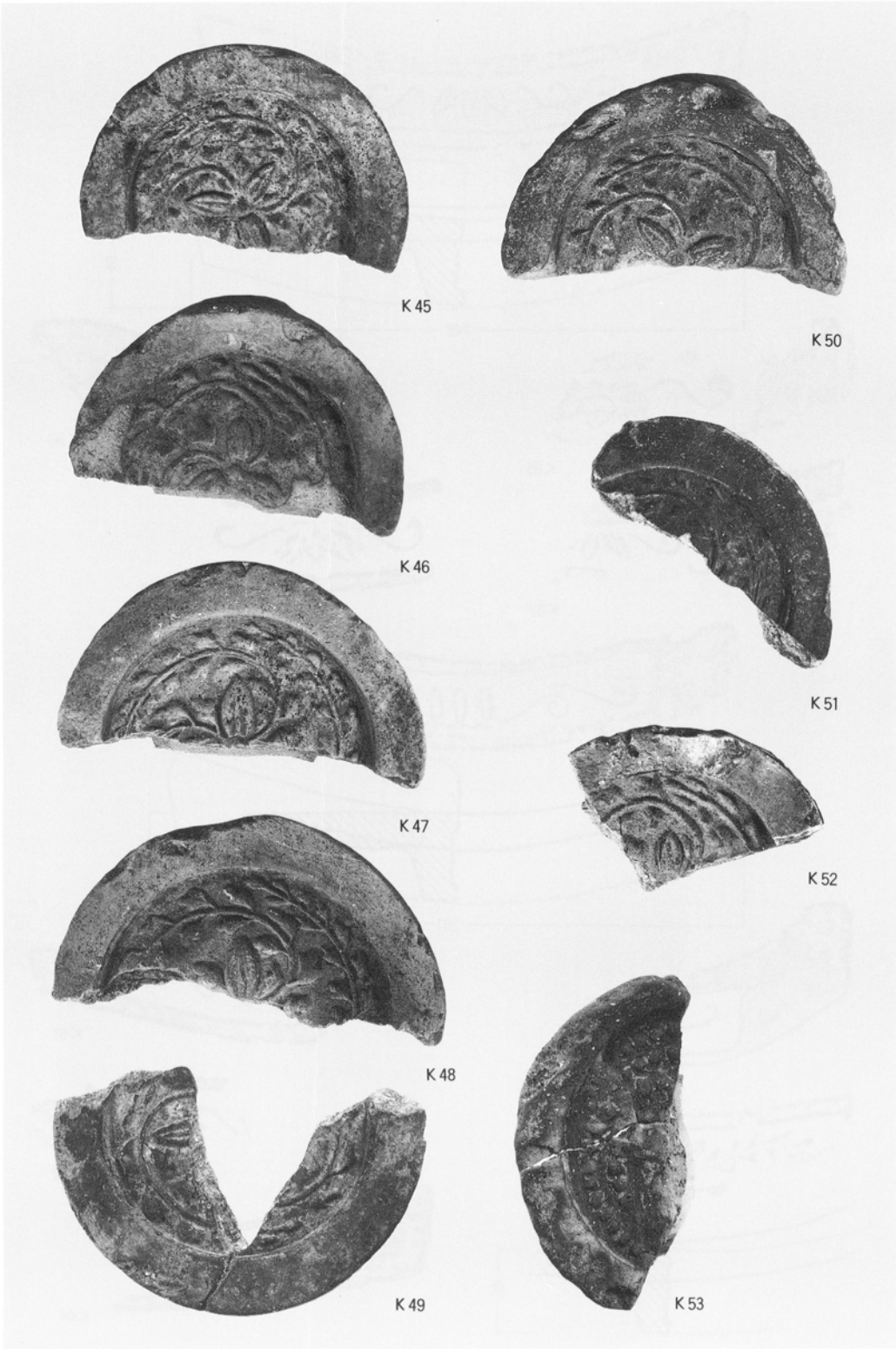
K 52

K 48

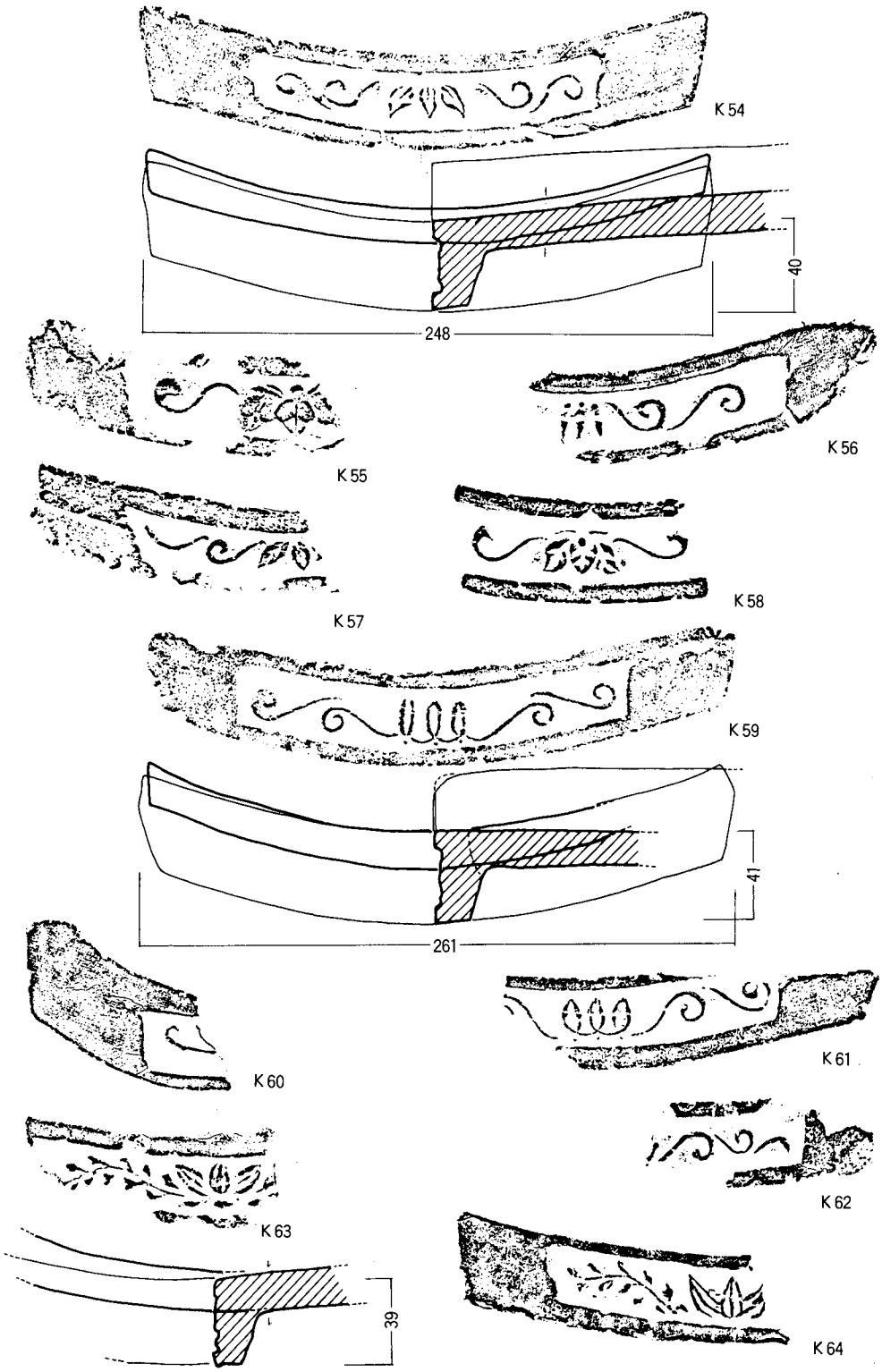
K 49

K 53

Ⅱ号溝出土瓦実測図（５）　縮尺 1/3　巴瓦　三つ巴藤文２類

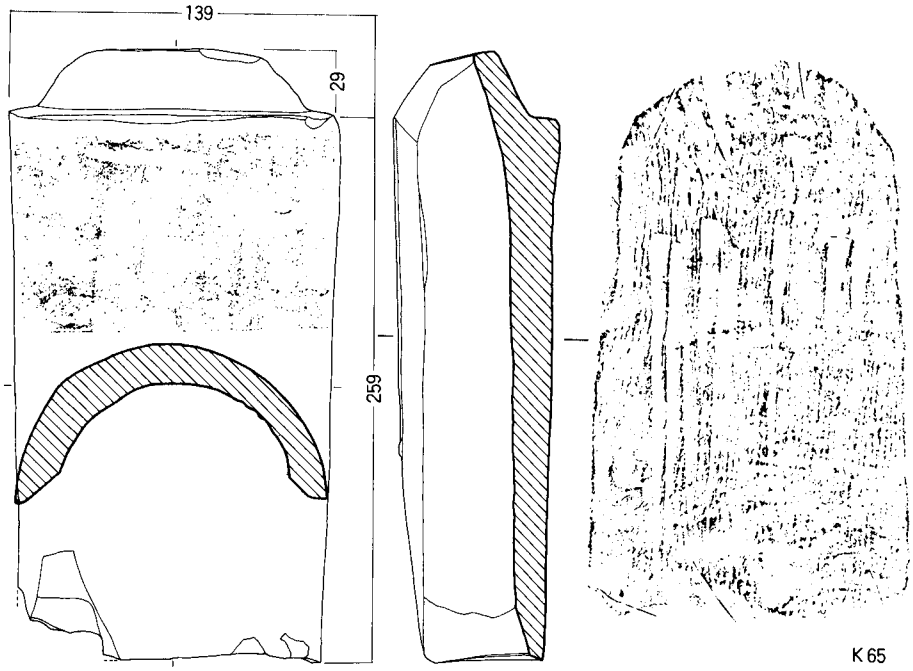


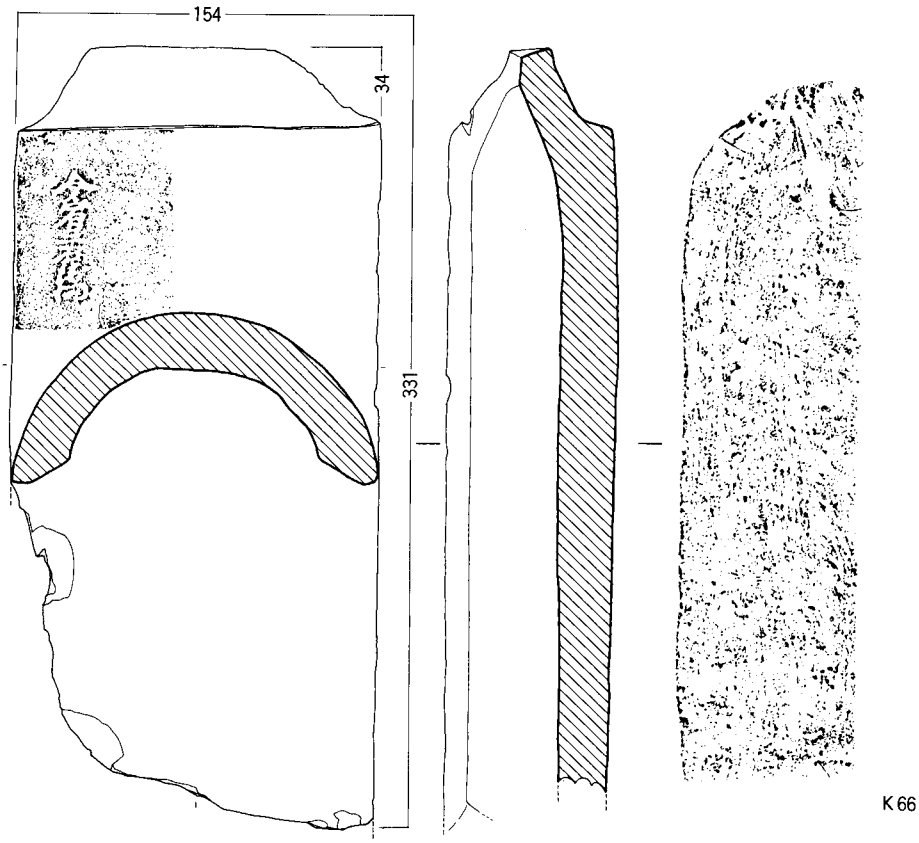
Ⅱ号溝出土瓦（５）　縮尺 1/3　巴瓦　三つ巴藤文２類



Ⅱ号溝出土瓦実測図（６）　縮尺 1/3　唐草瓦

Ⅱ号溝出土瓦（6） 縮尺 1/3 唐草瓦



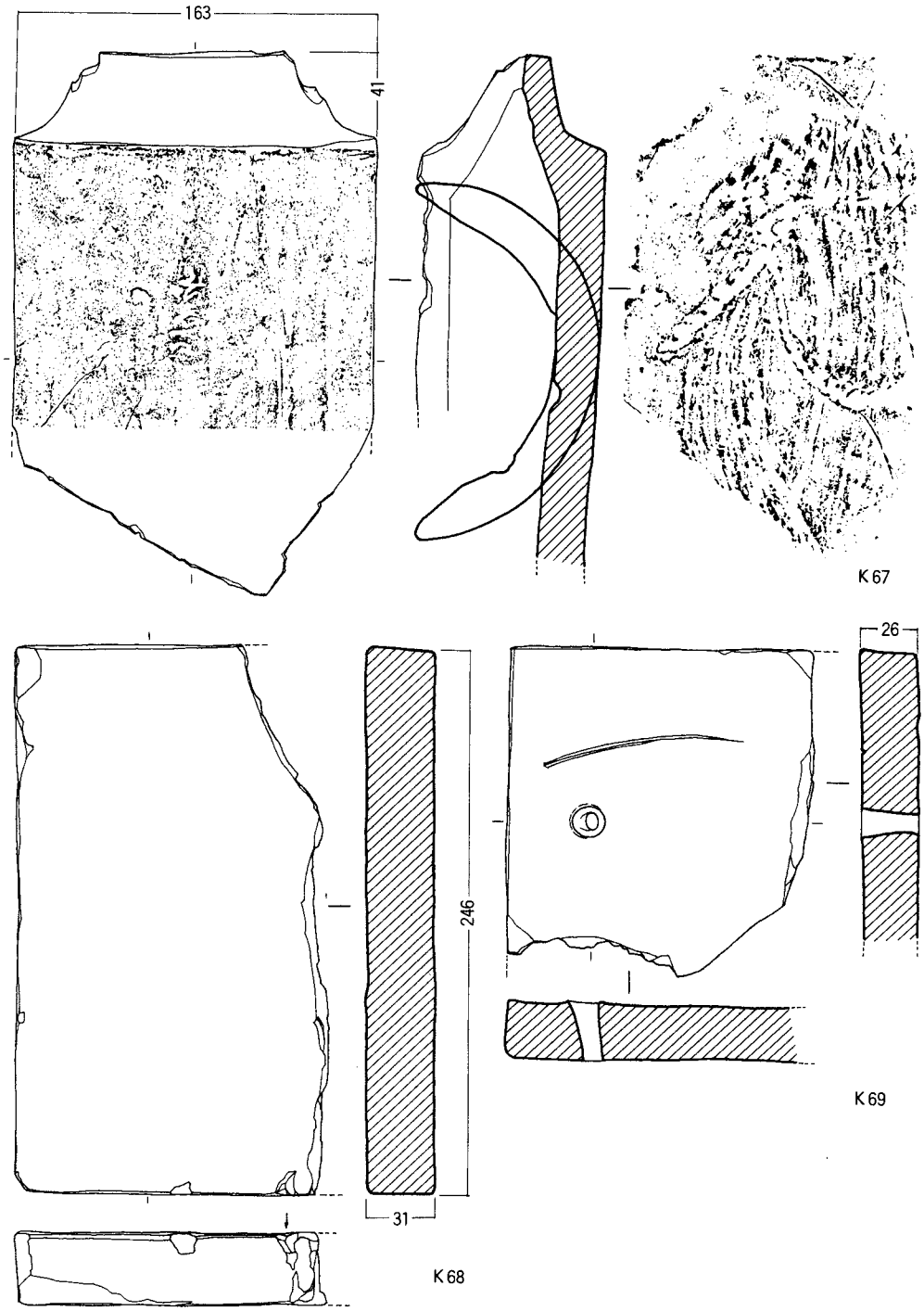


Ⅱ号溝出土瓦実測図（７）　縮尺 1/3　丸瓦

K 65

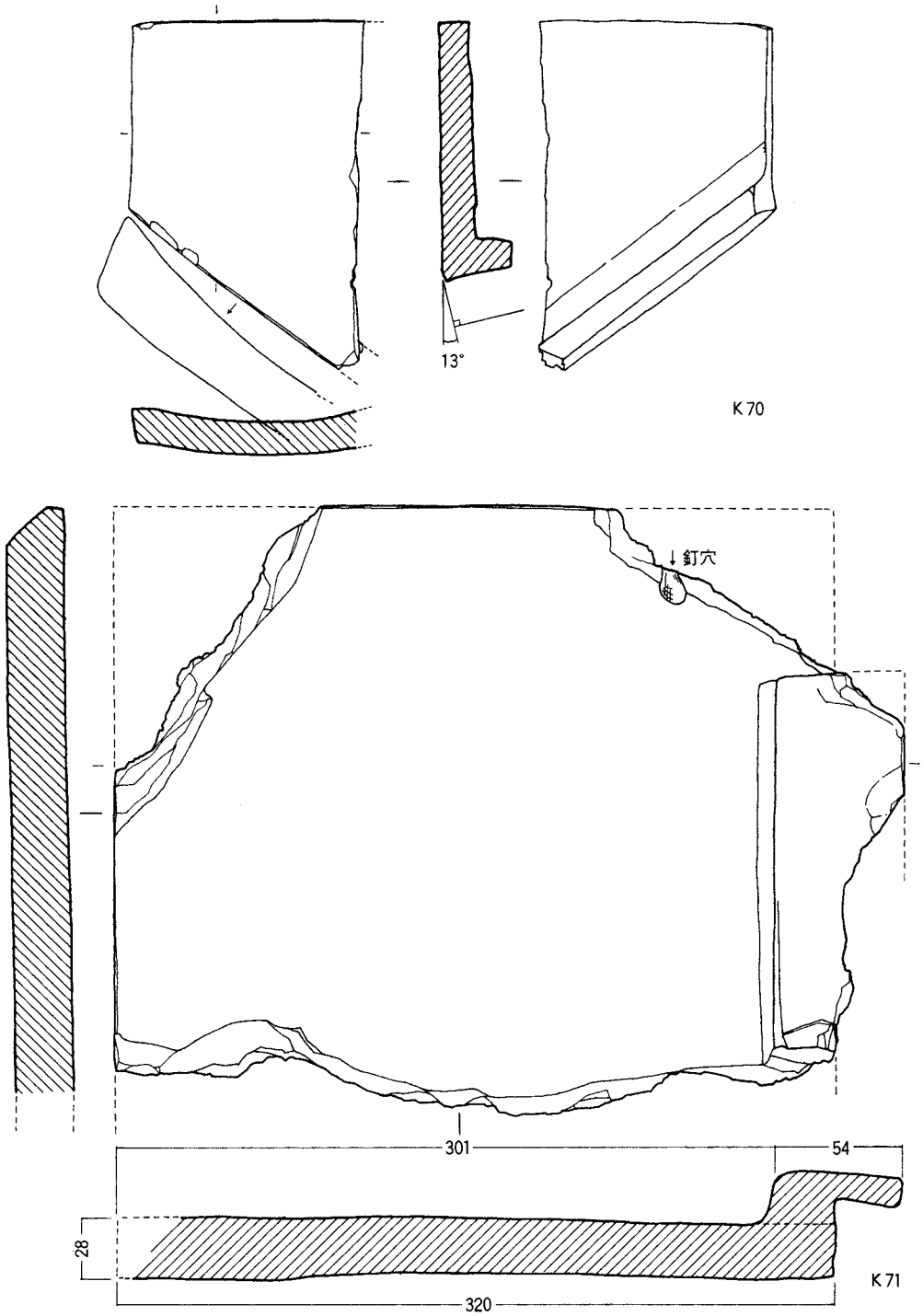
K 67

Ⅱ号溝出土瓦（７）　縮尺 1/3　丸瓦

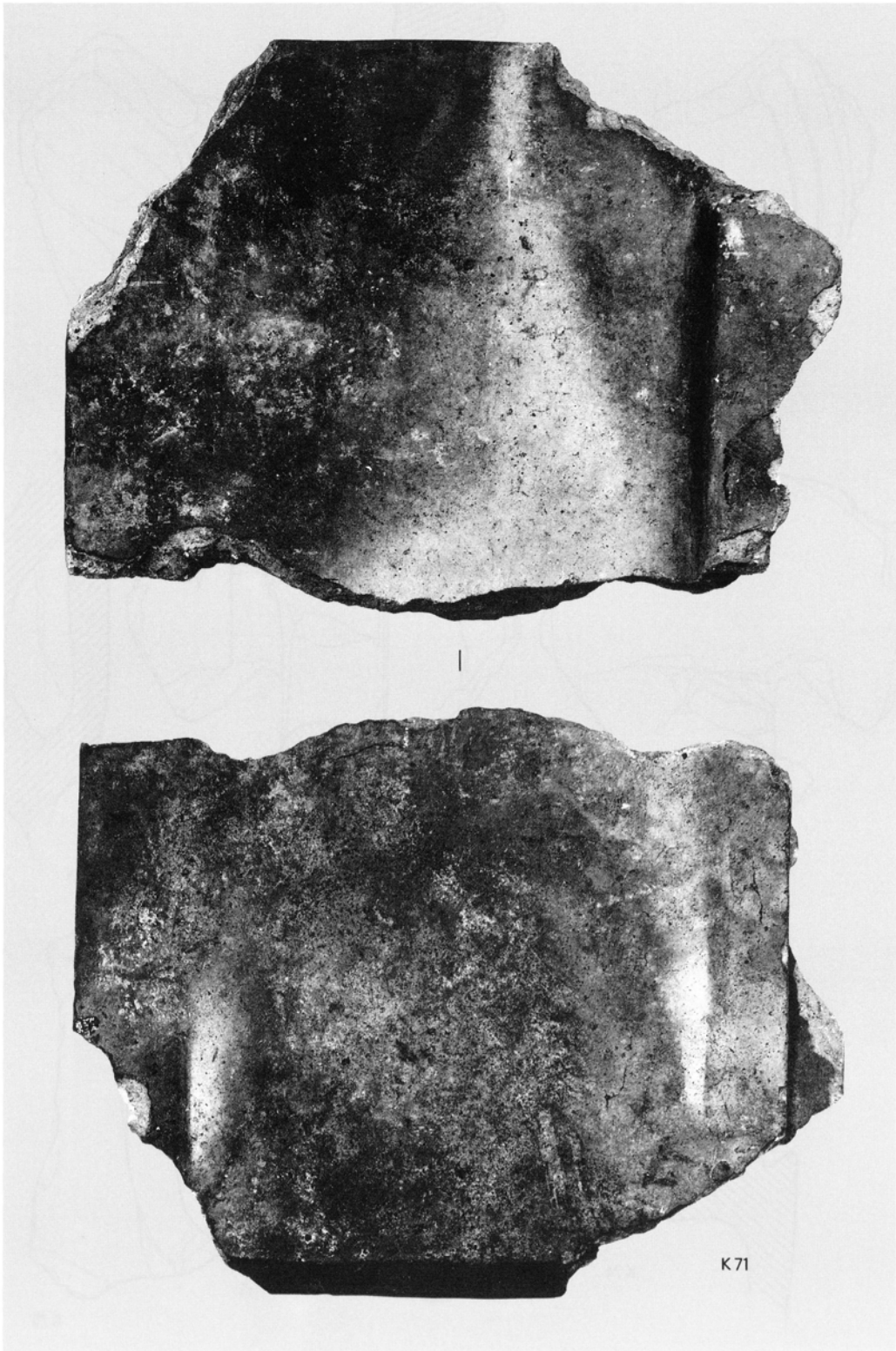


3号トレンチ・Ⅱ号溝出土瓦実測図（8）　縮尺 1/3　丸瓦　敷瓦　壁瓦

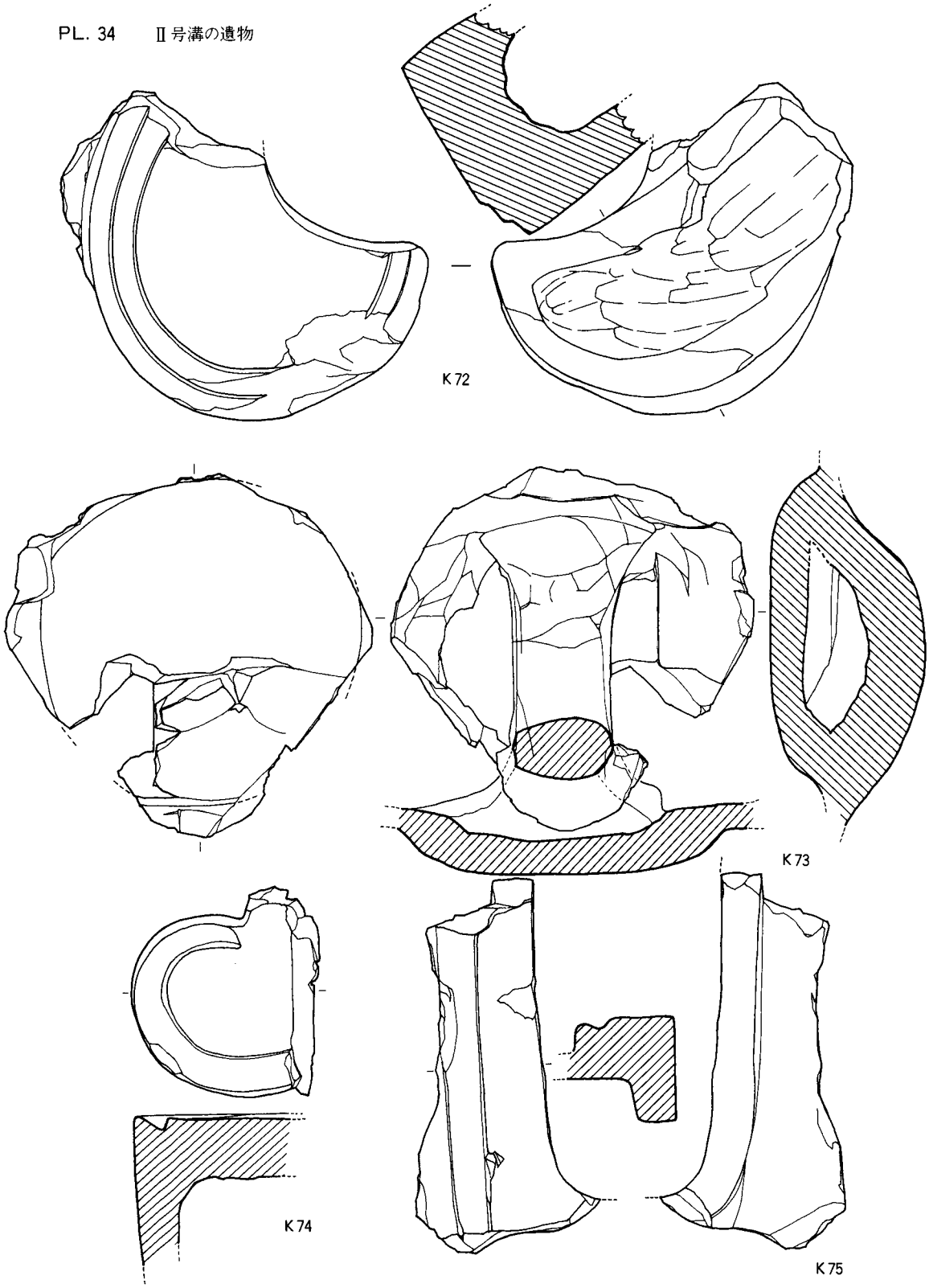
3号トレンチ・Ⅱ号溝出土瓦（8）　縮尺 1/3　敷瓦　壁瓦



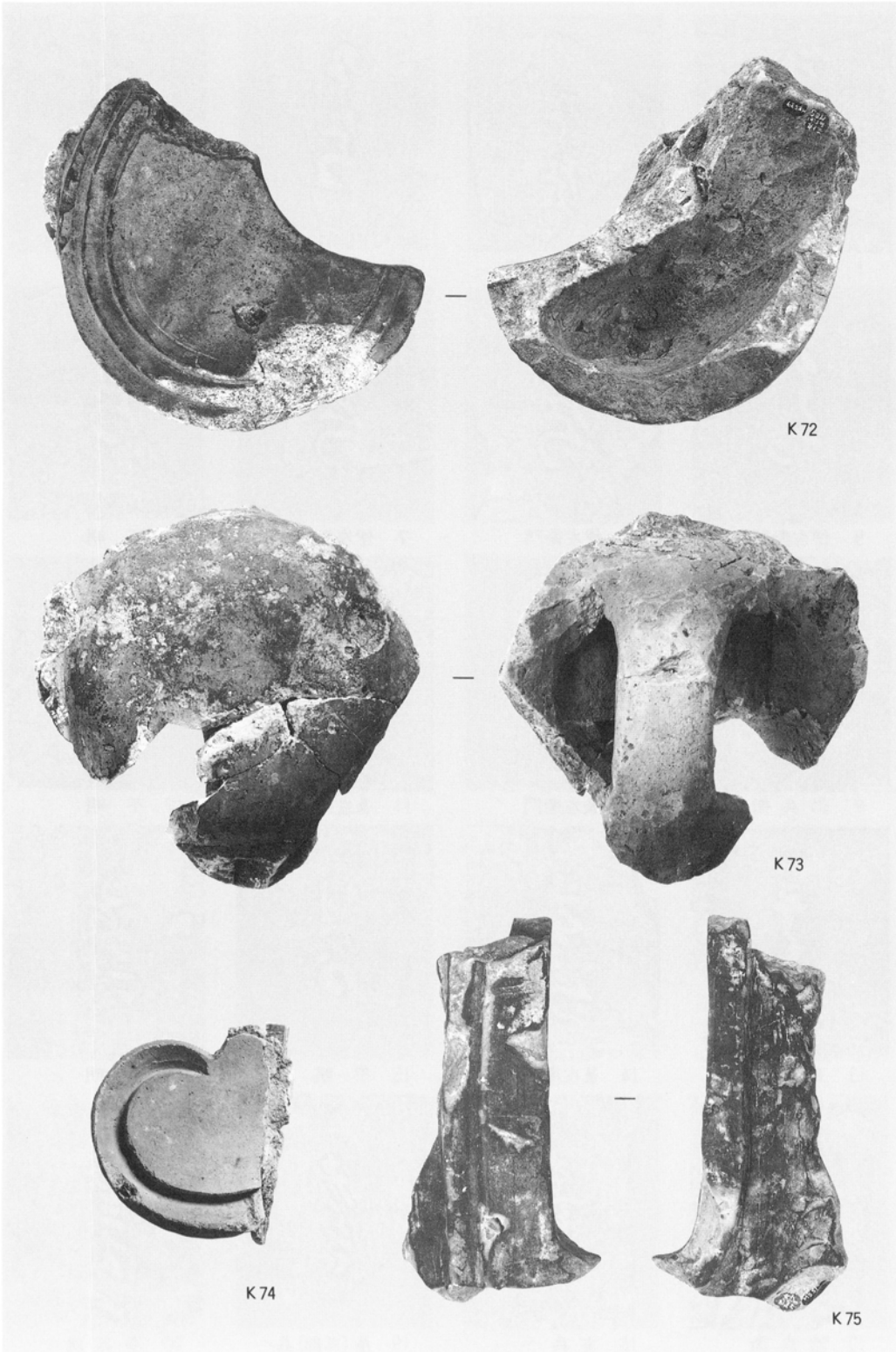
Ⅱ号溝出土瓦実測図（９）　縮尺 1/3　谷瓦　塀瓦



Ⅱ号溝出土瓦（9）　縮尺 1/3　塼瓦



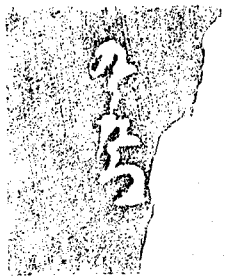
Ⅱ号溝出土瓦実測図（10）　縮尺 1/3　鬼瓦



Ⅱ号溝出土瓦（10）　縮尺 1/3　鬼瓦

1　九郎左衛門

2　九郎左衛門


3　九郎左衛門

4　市右衛門

5　伊左衛門

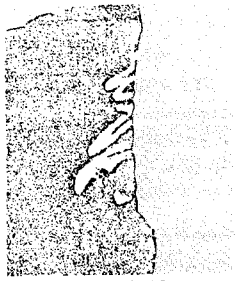
6　伊左衛門

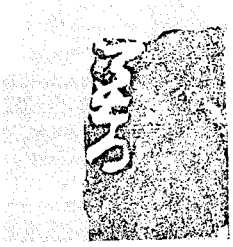
7　伊左衛門

8　不　明

9　仁兵衛

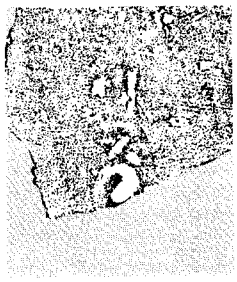
10　長左衛門


11　長左衛門

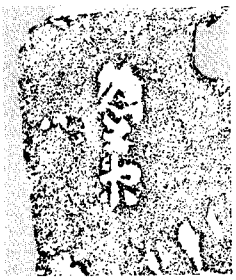

12　不　明

13　五郎右衛門

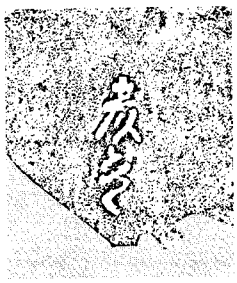
14　甚左衛門


15　不　明

16　不　明

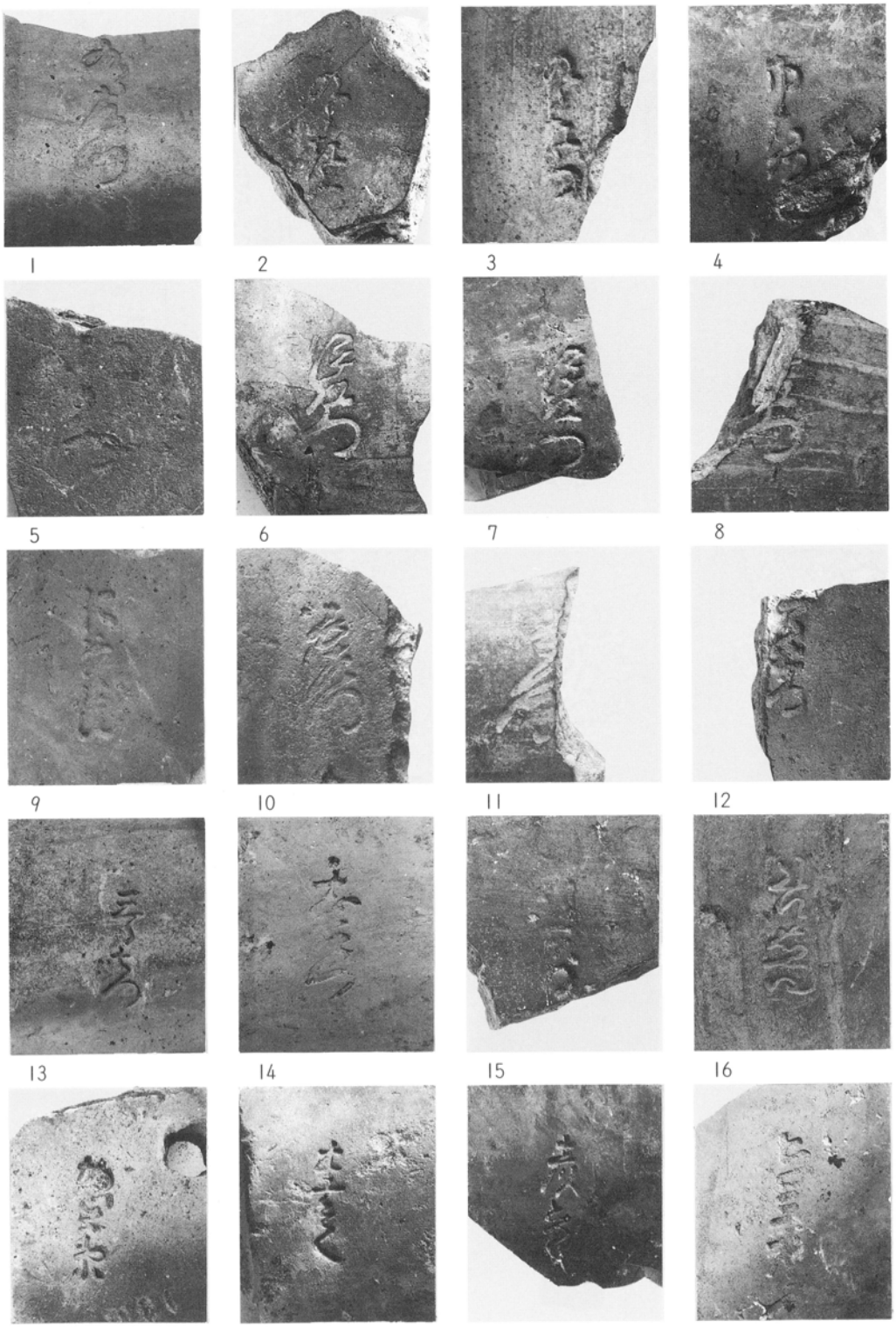

17　惣兵衛

18　杢兵へ


19　彦(三郎)兵へ

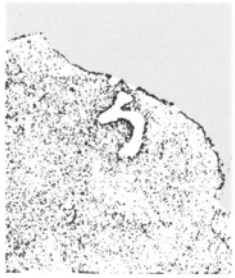
20　与三次

文字瓦拓影（1）　縮尺 1/2　　☆刻印銘の解読は田坂大蔵氏にお願いした。



文字瓦（1）　縮尺 ½

21　為右衛門


22　不　明

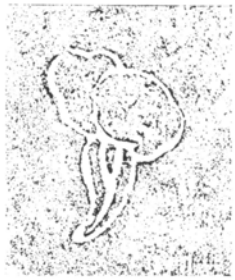
23　今宿三右衛門

24　今宿三右衛門

25　今宿三右衛門

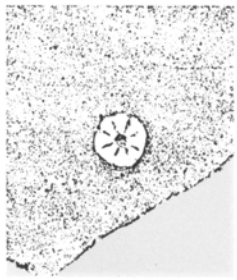
26　今宿又市

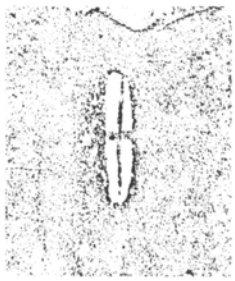
27　今宿又市


28

29

30


31


32

21

22

23

24

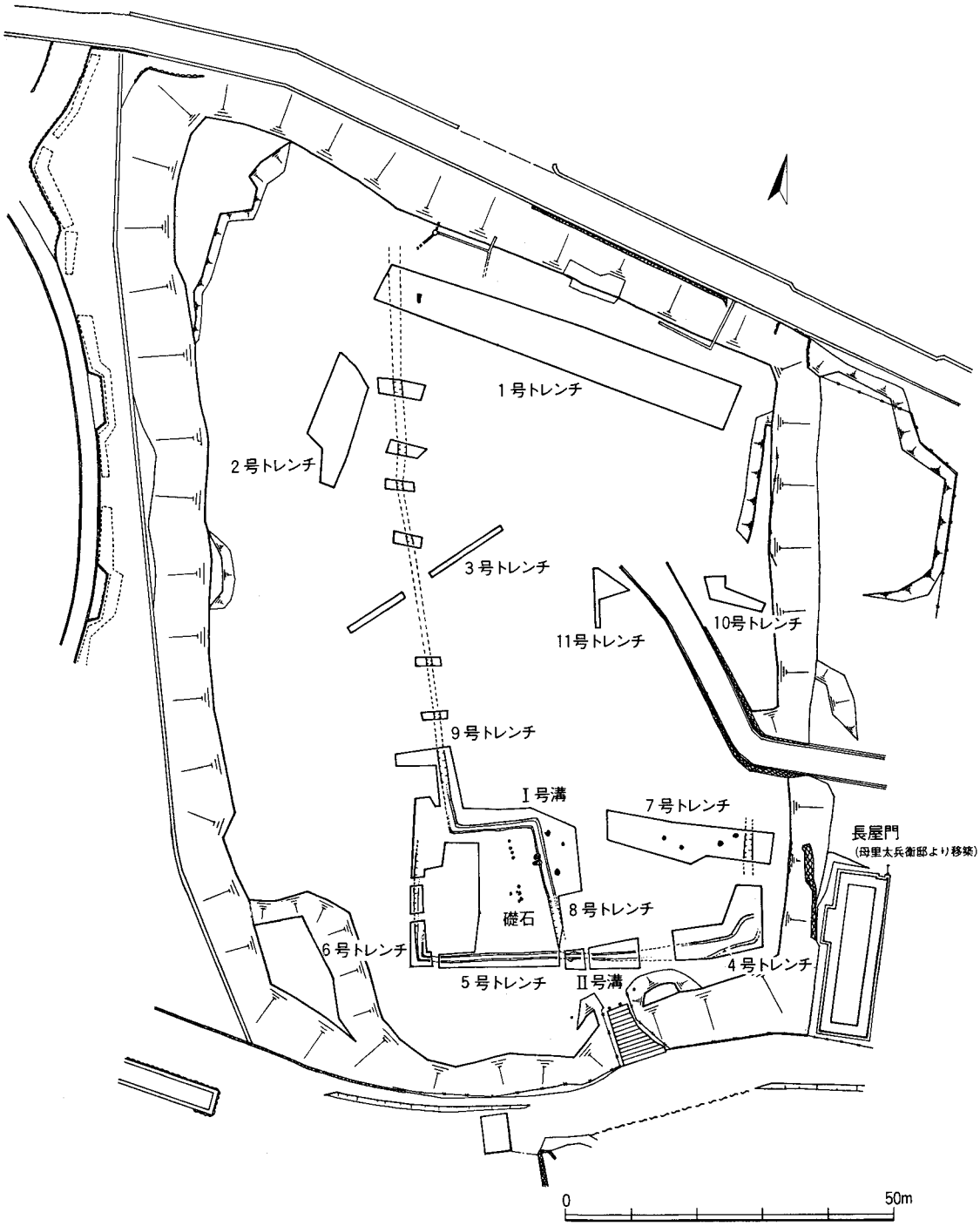
25

26

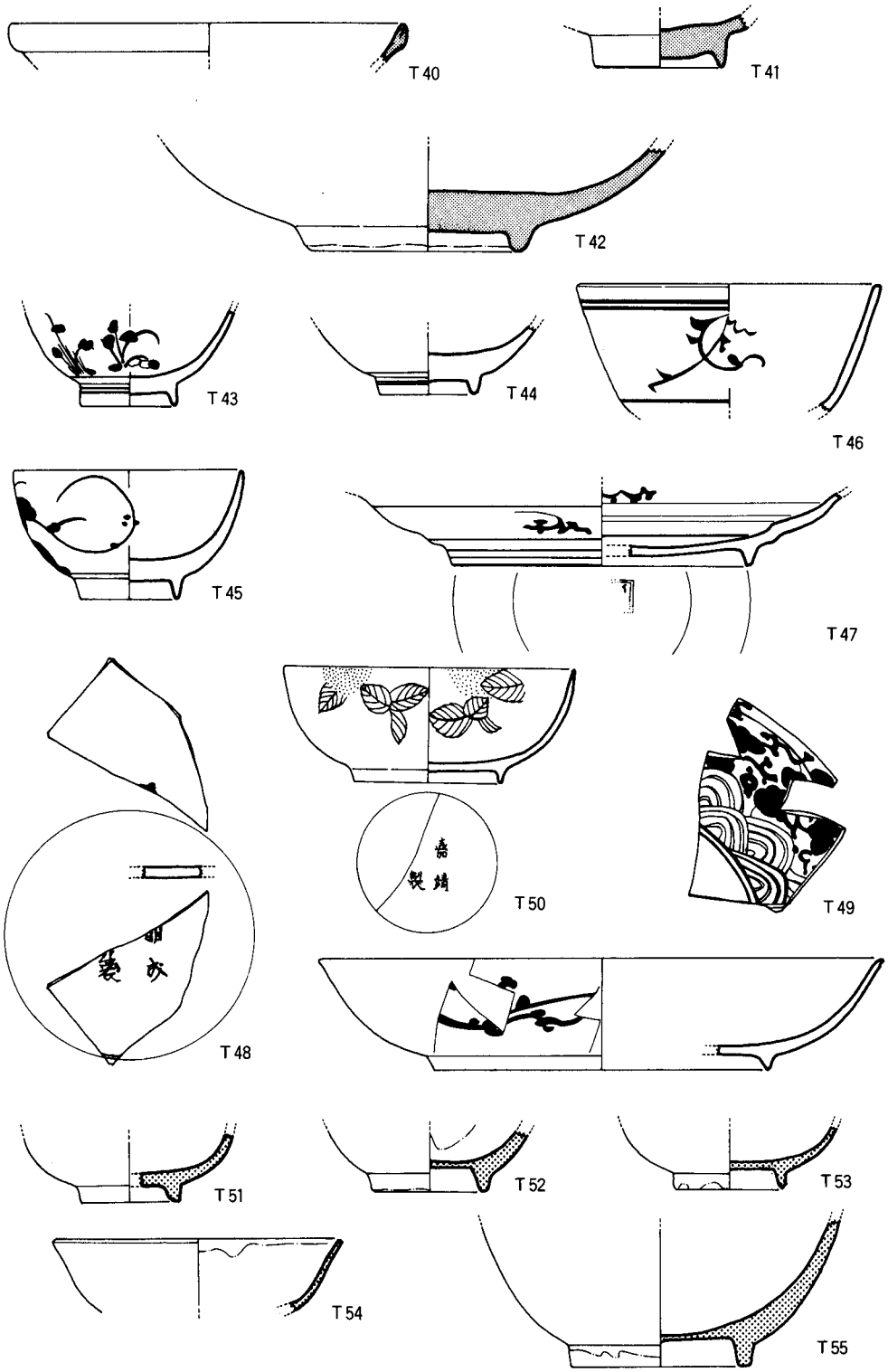
27

28

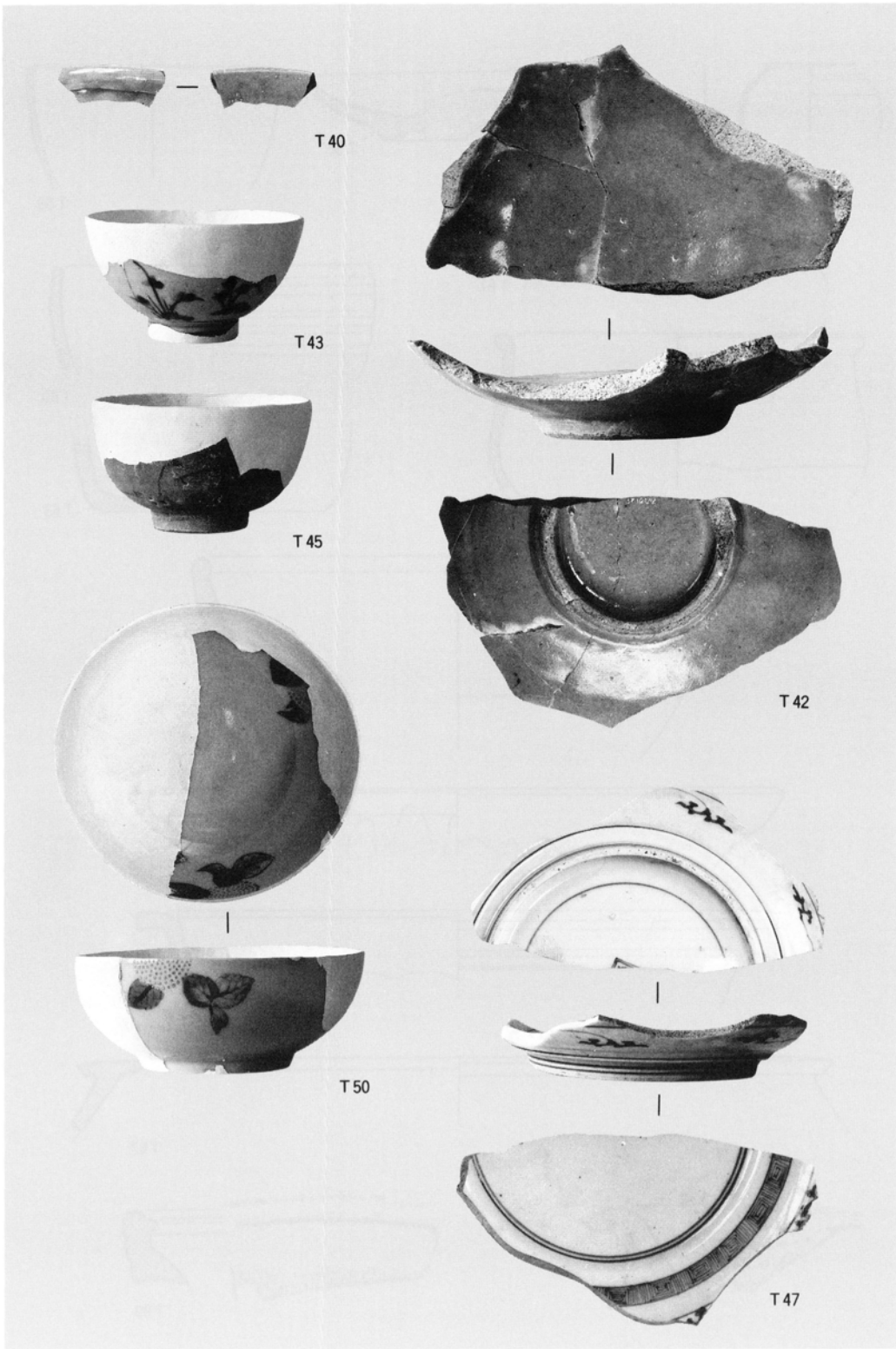
文字瓦拓影（2）　縮尺 1/2



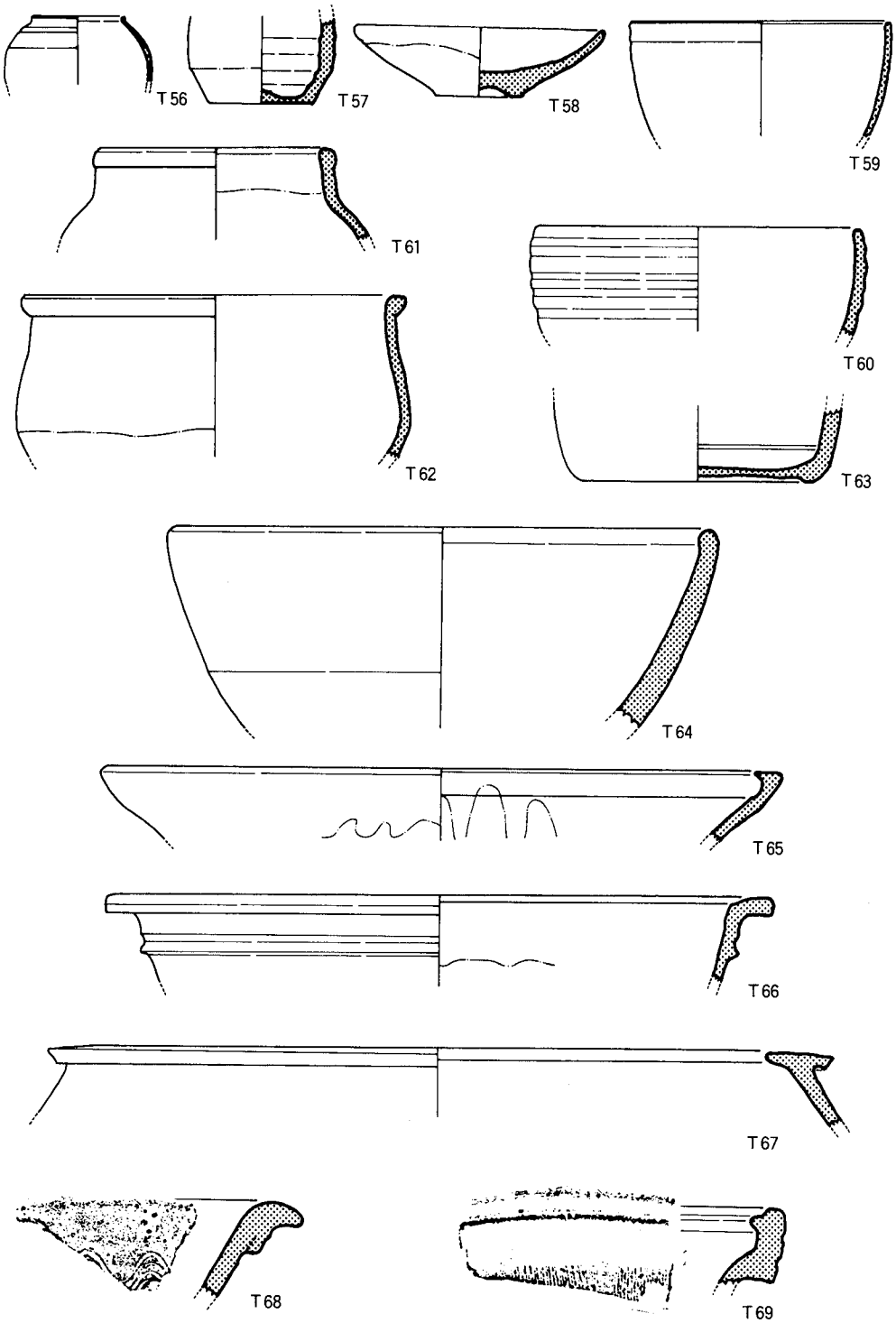
御鷹屋敷調査区平面図　縮尺 1/1000



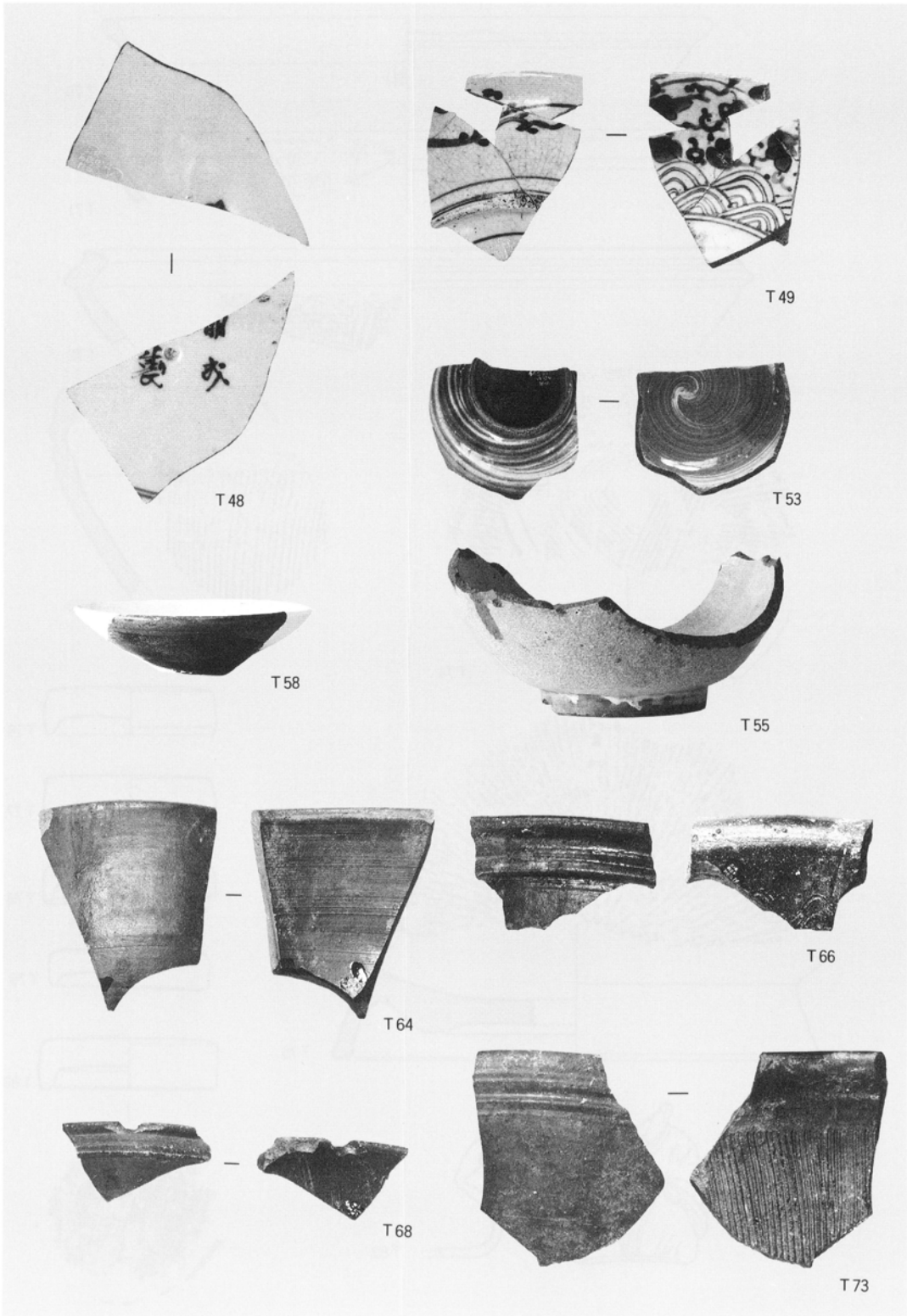
Ⅱ号溝出土遺物実測図（１）　縮尺 1/3



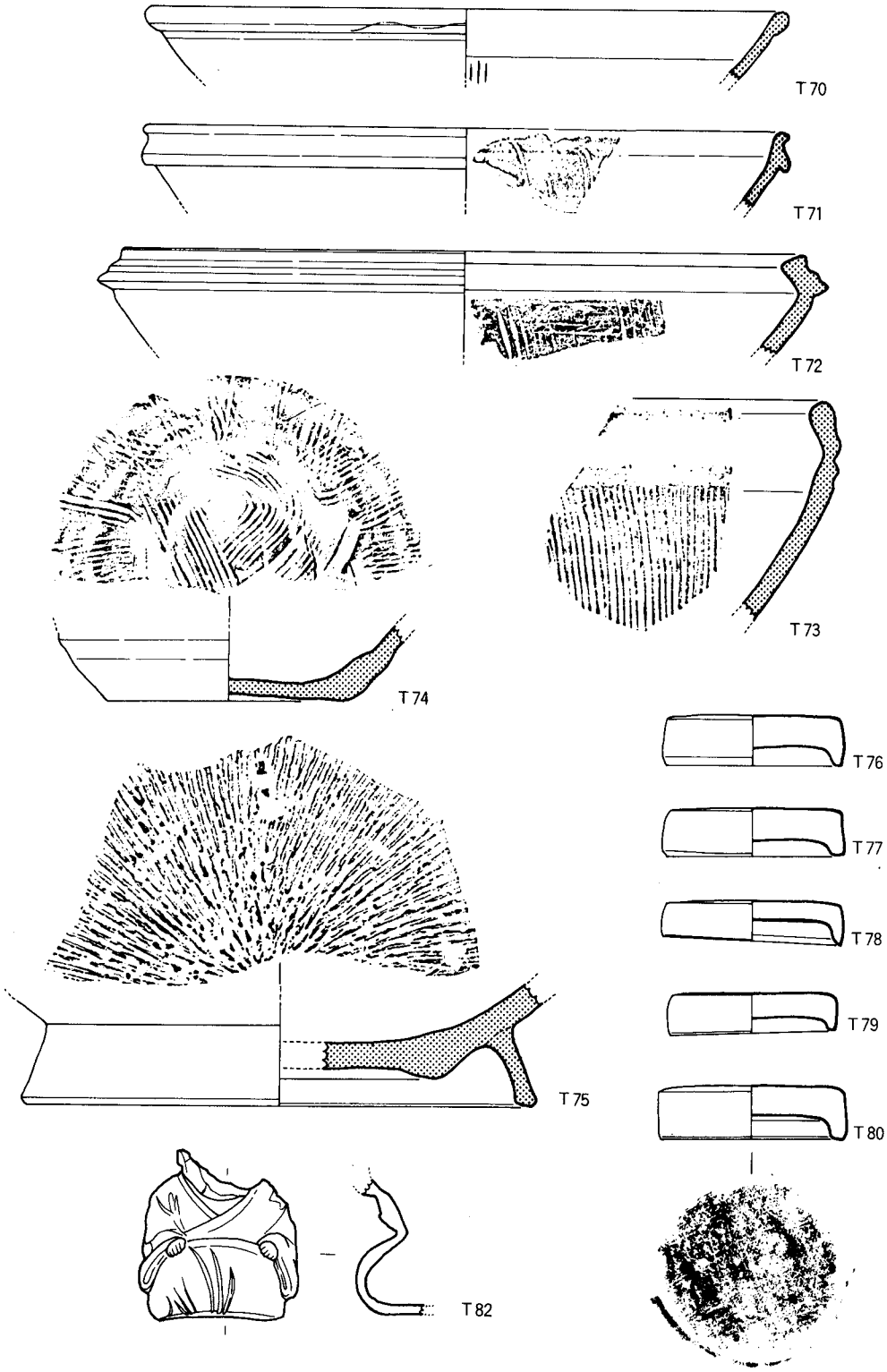
Ⅱ号溝出土遺物（1）　縮尺 1/3



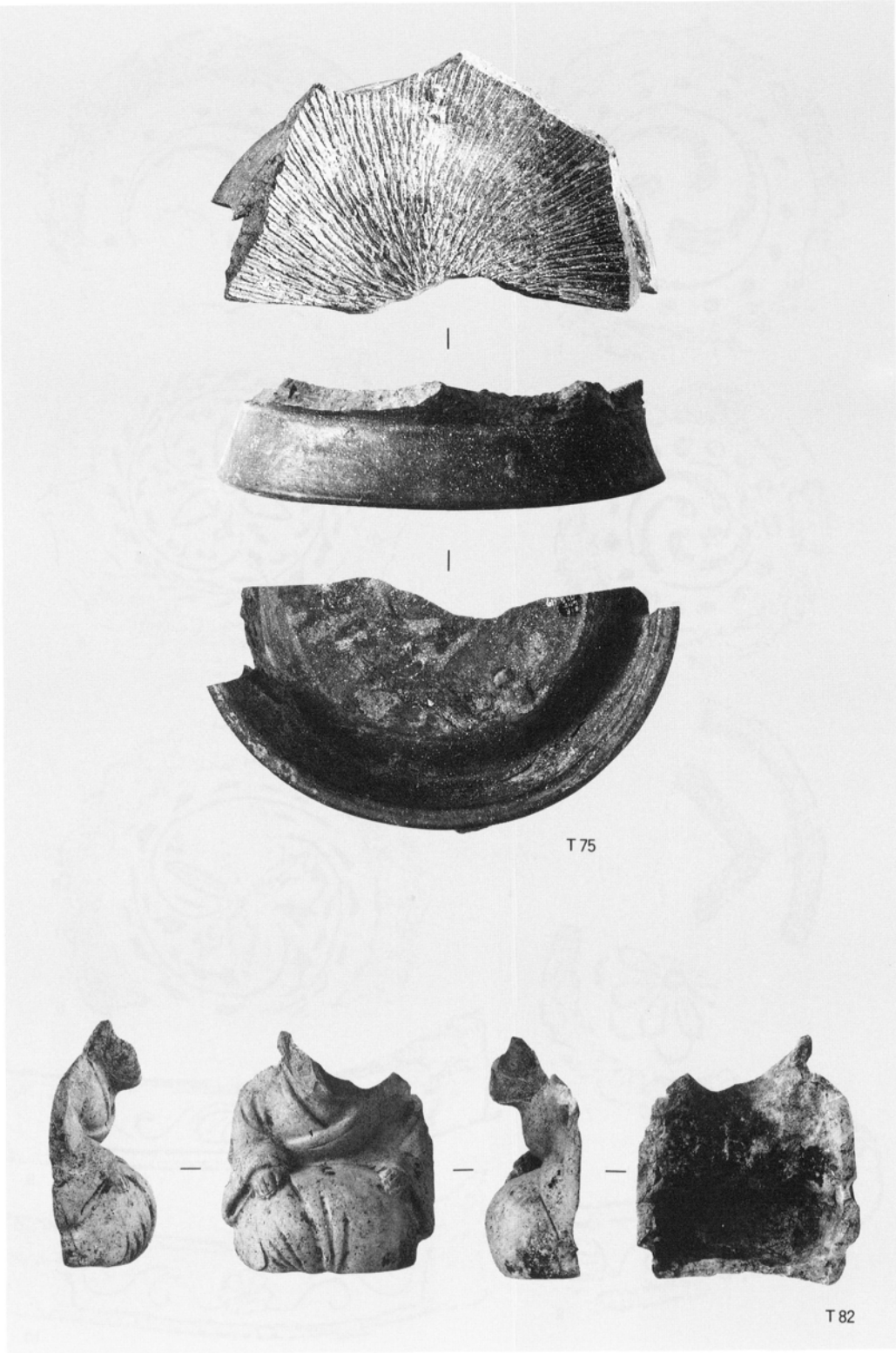
Ⅱ号溝出土遺物実測図（２）　縮尺 1/3



Ⅱ号溝出土遺物（２）　縮尺 1/3

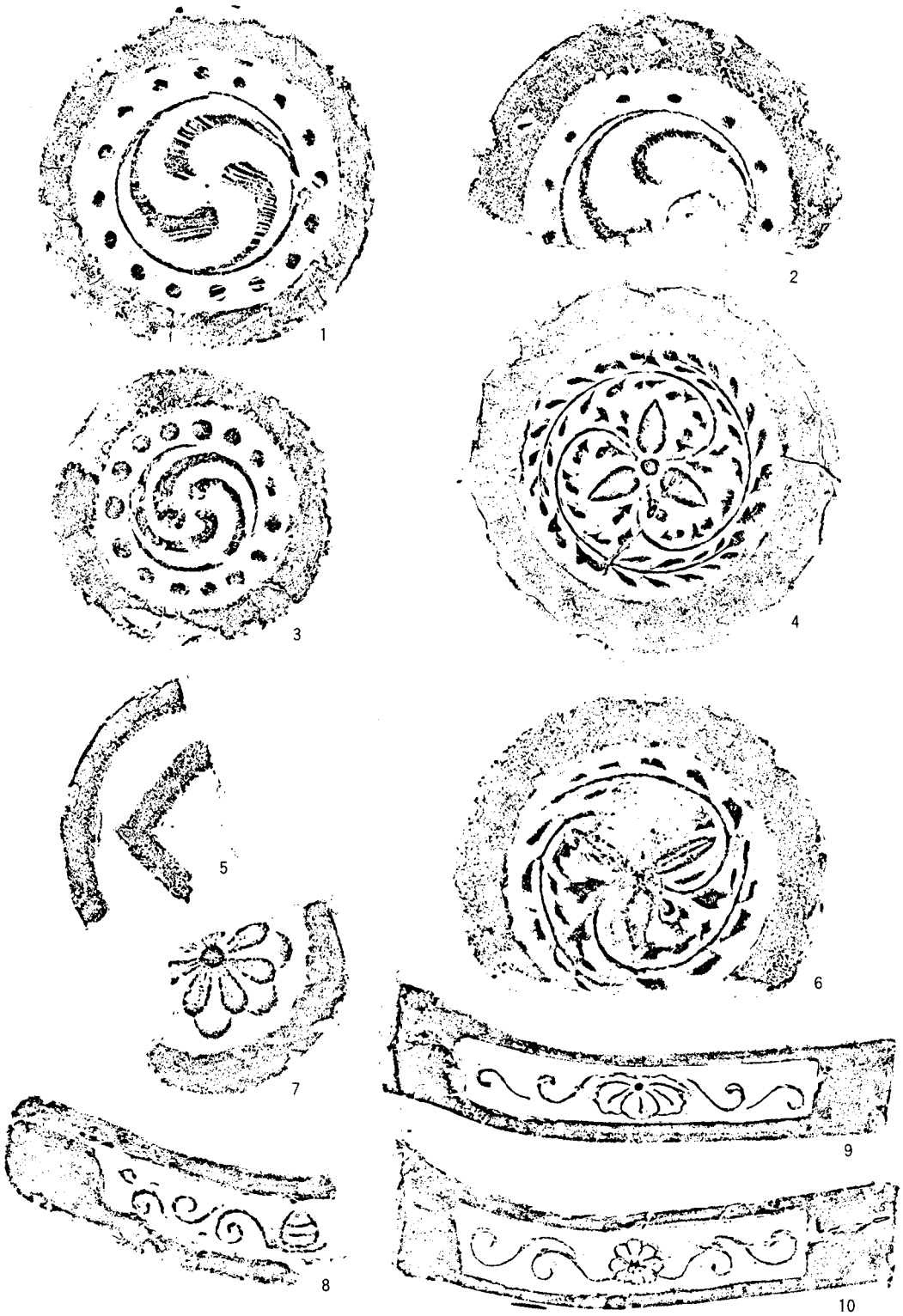


Ⅱ号溝出土遺物実測図（３）　縮尺 1/3



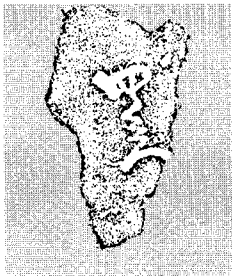
Ⅱ号溝出土遺物（3）　縮尺 ½、⅓

PL. 46　名島城、福岡城の瓦

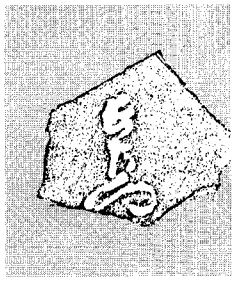


中山平次郎博士、高野孤鹿氏採集資料瓦　（名島城内　福岡城内）　縮尺 1/3

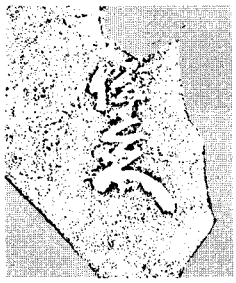
11


12

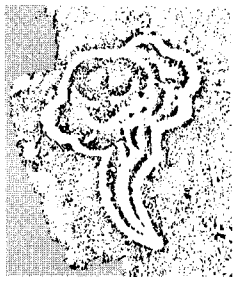
13

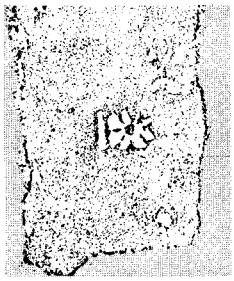

14

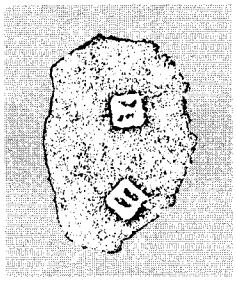
15


16

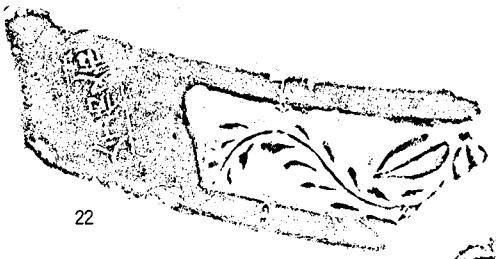
17


18

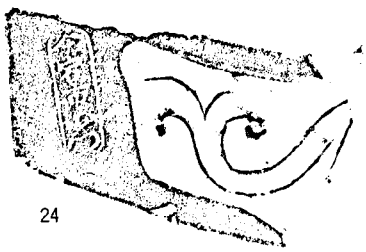

19


20

21


22

23


24

高野孤鹿氏採集資料　（福岡城内）　縮尺 ½、⅓

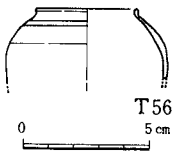
御鷹屋敷跡から出土した茶陶関係の陶片について

尾　崎　直　人　（福岡市美術館）

磁器以外の陶片で食器類の出土品は約150点があり、その多くは高取焼系統に属すると思われる製品である。ここでは茶の湯に用いられる器を中心にとりあげ、現存寸法が大きく現状が復原可能な主要陶片について記述を行なう。

茶　入　茶入と思われる陶片の総数は14点である。

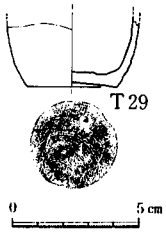
T56　極めて薄く精巧な作行の茶入の、口縁から胴上部にかけての陶片。暗緑色をした光沢のある釉が、内外にうすく均質に掛かる。口づくりは頸をほとんどもうけず、口縁をわずかに塗り返すようにして作った繊細なもの。肩には明瞭に段をつけ、口縁の肩との間には沈線を二条めぐらす。内外面とも平滑に仕上げていて、轆轤挽きのあとがほとんどのこらない。胎土は紫色がかったきわめて緻密な土を使用し、破断面はなめらかで鋭利である。



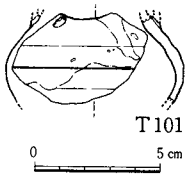
以上の、釉・胎土・造形などの特徴は、小石原鼓窯（1655～1688）跡から出土した茶入陶片の特徴と近似する。(注１)

T29　糸切底を含む腰部から下の茶入の陶片。おそらく肩衝形の茶入。内壁面は滑らかにととのえられ、濃淡の斑のある褐釉がうすく一面に施されている。外側面は現存陶片上部にわずかに柿釉風の褐釉が掛けられているのがのこる。腰部の丸みはカンナで削って成形したあとが明瞭。仕上げは大鋸谷窯(1688～1704)のものほど滑らかではない。底は右糸切につくる。破断面の胎土の色は紫色をおび、極めてきめ細かいもの。

これも小石原鼓窯出土の陶片と近似した特徴をもつ。胎土のきめ細かさと腰まわりの仕上げにおいて明瞭な特徴をもつ大鋸谷窯出土の陶片にくらべると、やや粗さが目立つことから小石原鼓窯時代のものであろう。



T101　沈線を含む肩から腰にかけての茶入の陶片。瓢形をした把手のついた形状の茶入と思われる。胴紐のすこし下まで緑がかった灰釉を薄く掛け、口辺から肩にかけ白釉を垂らす。内部は滑らかに仕上げており、褐釉をうすく掛けている。器厚は３～４ミリと高取の茶入としては厚手に作られている。胎土は淡く紫色がかった前二者と同一の土である。腰まわりはカンナ削りで最終的に形をきめ、その痕跡が明瞭にのこっている。

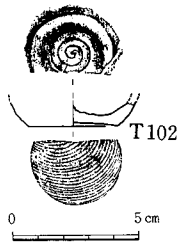


以上の、釉・胎土・造形などの特徴から、この陶片も小石原鼓窯の製品と推測される。

T102　糸切(右糸切）を含む茶入底部の陶片。内部にはうすく光沢があり苔色を帯びた褐釉を掛ける。底の中心には左まわりの渦巻文様が兜巾状にうず高くのこる。内側面は滑らかに仕

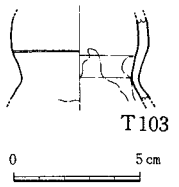
上げている。側壁の厚さは3ミリ。裾まわりはカンナで削って仕上げている。胎土は紫色がかった前者と同一の土を使用している。

この陶片もやはり小石原鼓窯の製品と推測される。



T103 瓢形の茶入の、肩から胴にかけての陶片。やや厚手に作り、胴半ばまで褐釉を薄く掛ける。内側面は比較的滑らかで、半分より上に内釉が掛けられている。破断面の胎土は紫がかったきわめてきめの細かい土で、鋭利な質感を持つ。

釉・胎土からこれもやはり小石原鼓窯の製品と推測される。

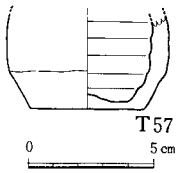


T57 底部から胴中ほどにかけての小壺形の陶片。大きさと形状の上からは茶入に近いが、胴に釉薬が掛けられておらず土も粗く、断定はできない。

他の陶片とことなり鉄分を多くふくむ砂まじりの土を使用。表面は赤褐色を呈す。底は糸切をのこさず板起こし風に作るが輪積みではなく、轆轤による成形である。器壁は5ミリとかなり厚い。内部には轆轤目跡が大きく明瞭にのこり、腰まわりの成形はカンナで削って仕上げている。現存する部分には釉薬は掛けられていない。

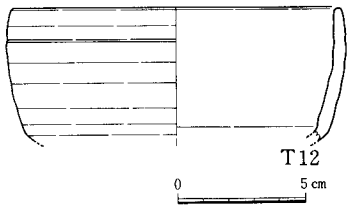
仮に茶入とすれば江戸初期以前の茶入の特徴を備えた陶片である。

以上の6点の主要な陶片のほかに、8点の小片がある。特徴は前記した6点の陶片に近い。



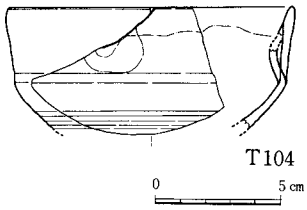
茶　碗　茶碗と推測される陶片は、18点（ただし、単なる碗も含む。）を数える。

T12 口径13.5センチ前後の茶碗の口から腰の屈曲部までの陶片。光沢のある藁灰釉（斑釉）を全体に掛けている。腰で強くまげて胴にふくらみをもたせながら挽き上げ、口縁は玉縁風に丸くつくる。器厚は6ミリとやや厚め。胴外側には水挽き時の目跡を明瞭にのこし、口縁の外側下方には篦による筋文を一条めぐらしている。胎土は目が粗く砂質を含むザラっとしたものを使用。全体に成形時の手法は豪快なものを感じさせる。



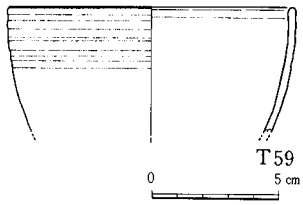
胎土・釉薬・造形などいずれも内ヶ磯窯の製品の特徴をよく示している。

T104 口径11.5センチ前後の茶碗の、口部から腰部にかけての陶片。器壁は2.5ミリときわめて薄手。器形は腰を膨らませて袋状にし、口部をほぼまっすぐに立ち上げる。胴の一部を指先で押さえて窪ませている。内部は滑らかに仕上げているが、胴側面には轆轤目がおだやかに立ち、腰から下には篦削りの跡が明瞭にのこっている。釉薬は内外に褐釉を薄く掛け、口縁に10ミリの幅で藁灰釉を掛け重ねている。胎土はきめこまかく、よく水漉したものを使用している。



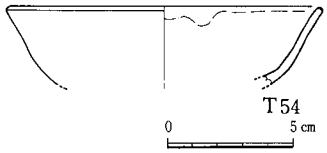
胎土・釉薬・器形などから判断して白旗山窯（1630～1665）の製品と思われる。

T59　椀形をした口径約11センチの茶碗の口縁の陶片。薄く均一な器厚（3ミリ）を持ち、灰釉を内外にうすく掛ける。口縁下には幅3ミリの篦筋線が5本めぐらされており、それより下はほぼ滑らかに仕上げられている。また口縁の一部を押さえて変形させている。胎土は灰色をしたきめ細かい土を使用している。

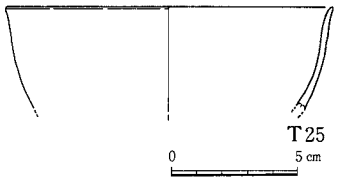


釉薬・胎土・形態などから判断して白旗山窯（1630～1665）の製品と思われる。

T54　口径約12センチで比較的丈の低い碗あるいは小鉢の、口縁から腰にかけての陶片。腰に丸みをもたせながら挽き上げ、口縁近くでわずかに外反させながら仕上げる。口縁上端は斜めに篦をあてているが、釉薬で丸みをおびている。器厚は胴部で3ミリであるが、腰部では4ミリとやや厚く作る。釉薬は外側面に光沢のある明るい褐釉を、内面に透明釉を掛けている。内外とも釉下に水挽き時の目跡がたつが表面は滑らかである。胎土は白色できめが細かく、ほとんど磁器に近い。

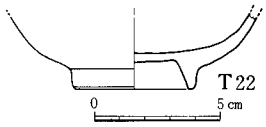


T25　口径が約12.5センチの椀形の茶碗の、口縁から胴にかけての陶片。胴にわずかに丸みをもたせながらおだやかに挽き上げ、口辺を心持ち外反させながら口縁を丸くつくる。器厚は2.5～3.5ミリと薄手。釉薬は透明釉を薄く掛けており、内側には施釉時のムラがある。表面にはきわめて細かい貫入が発達する。胎土は灰色できめ細かい。



胎土・釉薬・形態などから判断して17世紀後半の製品と思われる。

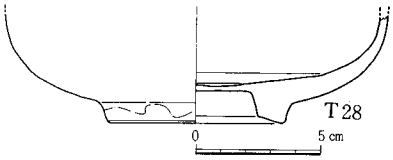
T22　椀形をした口径約12～13センチの茶碗の腰部から下の陶片。T53の茶碗と同一手法の製品。またT28の深鉢とも釉薬や胎土、技法が酷似する。内外ともに表面をきわめて滑らかにととのえ、見込は平らに仕上げる。高台の削りに特色があり、高台内を周囲より一段と深くかつ平らに削ってつくる。また高台内壁は斜めに直線的に削られており、角の部分は丸みをもたない。釉薬は高台内と高台脇に淡褐色の灰釉を掛け、それ以外の部分にはくっきりとした明快な白刷毛目を施している。表面は光沢をもち、こまかい貫入が発達している。胎土は、比較的きめ細かいが、ねっとりとした土味のものとは異なる。砂は含まない。



17世紀末から18世紀初頭ごろにかけての高取系統の窯の製品と思われる。

鉢　鉢は断片まで含むとかなりの数があるが、次にあげるのは、特に作りが丁寧で、ま

たT22、T53との類似で注目される製品である。



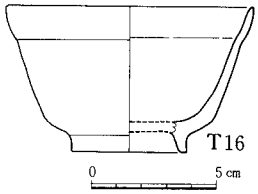
T28　小型の深鉢の腰から下の陶片。胴径はほぼ15センチ。T22、T53と釉薬・胎土・技法などが酷似する。内外ともに表面を滑らかにつくり、見込に蛇の目の釉剝ぎを施している。見込中央は浅く一段窪めてつくっている。高台は厚くがっしりと削り出す。高台のつくりはT22と似ていて、高台内を周囲より一段と深くかつ平らに削り、また高台内壁を斜めに直線的に削って、高台内との角の部分に丸みをもたせない。ただ畳付きは厚く(10ミリ)、内周を外周より低くつくる。釉薬は、外側面は裾まで淡褐色の灰釉を掛け、内側は蛇の目から外を白刷毛目、中央の窪みには外側面と同じ釉を掛ける。胎土はT28、T53と同じ種類の土。

17世紀末から18世紀初頭ごろにかけての高取系統の製品と思われる。

水　指　水指と明確に断定できる陶片は一点もない。ただ可能性の高いものは数点あるが、いずれもきわめて小さな断片であり全体の形を推定できる大きさではない。胎土・釉薬から判断して、いずれも17世紀後半から18世紀にかけての高取の製品と思われる。

向　付　数は多くないが向付と思われる陶片が若干含まれている。

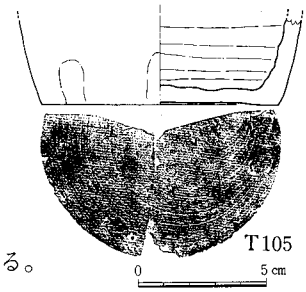
T16　口径が約9.5センチの向付の口縁から高台までの陶片。腰で明確な段をつけ、口部をタガ状に一段はりだして口縁は薄く作る。内外ともに滑らかに成形し、水挽き跡をのこさない。高台まわりの仕上げもきわめて丁寧で、畳付きの角が丸く作られる。釉薬はガラス質の透明釉がうすく均質に掛けられ、表面には細かい貫入が発達している。胎土は白い半陶半磁のきわめてきめの細かい土であるが、破断面は東皿山の土のようなつやのある滑らかさはない。



釉薬・胎土・形態から18世紀初期の高取系の製品と思われる。

壺　茶陶ではないが、丁寧に作られた上手物で、胎土や釉薬が水指とほとんどかわらないものが一点ある。

T105　底径が9.4センチの壺の底部陶片。轆轤挽きで成形し、底には細かい糸切のあとがのこる。内側には轆轤目を明瞭に列すが、外側はきわめて滑らかに仕上げている。内部は無釉。外側は裾まで丁寧に褐釉が掛けられている。水指としてはやや小さく、また内釉を施していないところから、液体以外のものを入れる容器と思われる。あるいは小型の茶壺かもしれない。釉薬は小石原時代の製品に多く見られる、それほど光沢の強くない黒い斑点のまじる褐釉を使用している。胎土も小石原の土に似ている。



おわりに

出土した陶片のうち、茶陶に属すると思われる主な陶片は上記のとおりである。これだけの

茶の湯関係の器の遺物が出土していることにより、少なくともここが茶の湯に係わって使用されていた区域であることは疑うことができない。茶碗類の破片が多いのは、使用後に水屋で洗うためそれだけ破損する機会も多いからであろうと思われるが、注目すべきは、茶入の陶片が意外と多いことである。茶入は水洗することもないし、もともと見かけが脆弱な器であるから大切に扱うため、破損の機会も他の器類に比べるとそれだけ少ない。火中した痕跡もない。14点という数は、発掘された部分が遺跡全体のごく一部分であることを考えると、少し異常な数量であるように思われる。またそれらの生産地はすべて高取焼であり、時代も中期（17世紀後半から18世紀前半）の製品とほぼ限定されているのも不可解な点である。単に永い時期にわたる茶事の結果としての破損した陶片の集積であるなら、高取以外の窯の茶入が含まれていてもよさそうなものである。

ここで思いあたるのは、「高取歴代記録」(注２）に「天和年中に、松の木坂御矢倉において光之公綱政公の御前で八郎に焼きものを作らせ、めがねにかなうものを上座郡（小石原村）に持ち返らせ焼成させた」との記録がみえることである。焼きあがった製品は、当然ながら福岡に送りかえされ、光之・綱政自らがみて選別したことであろう。光之・綱政父子が歴代藩主のなかでも陶磁生産に関心が高かったことは、「筑前国続風土記」(注３）などから見て取れるが、「高取歴代記録」の記述もその一例であろう。御鷹屋敷は如水の隠居屋敷との言い伝えがあり、少なくともここが茶事に係わって使用されていた建物跡であることは間違いない。仮に光之が藩窯である高取焼の製品に対し、上記のような係わりを持っていたことが事実だとすれば、この御鷹屋敷跡がその舞台として使用された可能性が高い。焼き上がった製品の選別後に処分廃棄された茶入の陶片と考えると、前述の疑問点も納得されるのである。

一昨年から小石原村皿山でいわゆる小石原中野窯の発掘調査が行なわれ(注４)、磁器をふくむおびただしい数の製品群が出土している。小石原中野窯は光之が殖産興業のため、天和年中に開かせたと伝えられる窯である(注５)。現在のところ御鷹屋敷跡出土の陶片と同一の製品はみあたらないが、釉調や作風は比較的似ているものが見受けられる。

御鷹屋敷跡出土の茶陶関係の陶片の多くは、17世紀後半から18世紀前半の高取焼であるという事実から推測すると、高取焼を通してみるかぎり、歴代黒田藩主のうち、この遺跡ともっとも深い係わりを有するのは黒田光之、綱政両藩主ということになろう。

注

1．拙稿「高取焼茶入編年試論――出土陶片を中心に――」『美術史』第125冊、平成元年3月、日本美術史学会
2．「高取歴代記録」『高取家文書』高取静山編 昭和54年１月、雄山閣
3．『筑前国続風土記』巻二十九
4．『中野上の原古窯跡』福岡県朝倉郡小石原村文化財調査報告書第１集、小石原村教育委員会、昭和63年３月31日
5．『筑前国続風土記』巻二十九

筑前国福岡城三ノ丸内鷹屋敷
（図録編）
福岡市埋蔵文化財調査報告書　第59集

1990年３月31日発行

発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目８－１
電話(092)711-4667(埋蔵文化財課)

印刷　ダイヤモンド印刷株式会社